

# 成瀬記念館

## 2012

---



N<sup>o</sup>.27

日本女子大学成瀬記念館

シリーズ“創る”(6) 藍に生きて

# 福井 貞子 絵絣展

2012年1月17日(火) - 3月3日(土)

造形芸術の分野で活躍する卒業生を紹介するシリーズ“創る”第6弾として、鳥取県倉吉市の伝統工芸「倉吉絣」の作家・研究者 福井貞子氏の作品展を開催。(91頁)

手紡ぎの実演



展示室



ギャラリートーク

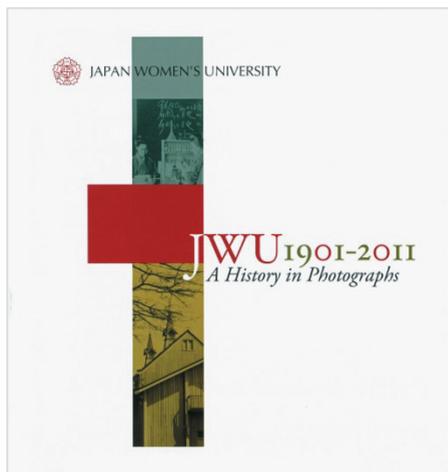


福井氏より成瀬記念館に寄贈された絵絣「親子亀」

創立 110 周年記念出版物 (非売品)

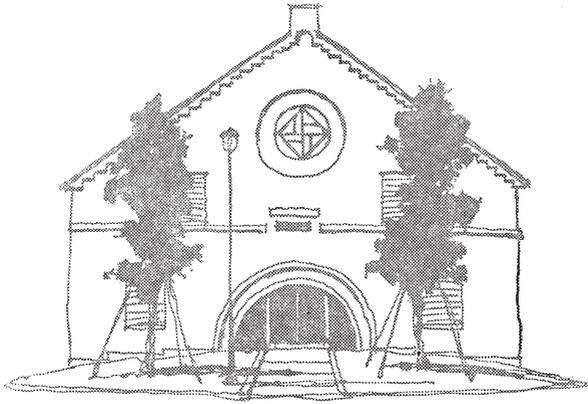
# JWU 1901 – 2011

## A History in Photographs



翻訳 ソートン不破直子  
編纂 成瀬記念館  
発行 日本女子大学(2011)





# 成瀬記念館 2012

No. 27

## 目次

### 口絵

シリーズ創る(6) 藍に生きて 福井貞子 絵絢展  
 創立一〇周年記念出版物

### 巻頭言

創立一二〇周年に向けて新たな日本女子大学を目指す  
 …… 蟻川 芳子 4

### 随想

上代タノ先生に学ぶ…………… 原 育子 6  
 絵絢展、藍に生きて…………… 福井 貞子 8

広島県新庄学園訪問記―成瀬校長の  
 蒔いた種―…………… 後藤 祥子 10

### 研究ノート

E・P・ヒューズの *English Literature*  
*for Japanese Students* と成瀬仁蔵…………… 白井 堯子 14

### 資料探訪

家政学研究科設置に向けて上代タノがロックフェラー  
 財団に要請した支援…………… 蟻川 芳子 35

### 調査報告

旧制時代における本学への留学生

附 日本女子大学校留學生名簿…………… 大門 泰子 49

### 未発表資料

成瀬仁蔵講話1 第一学年に於て

2 1 明治四十三年五月十四日…………… 71

2 2 春期運動会批評会後にて

1 明治四十三年五月二十一日…………… 78

### 未発表資料

成瀬仁蔵宛広岡浅子書簡 明治二九年六月一五日…………… 80

二〇一一年度活動の記録…………… 85

二〇一一年度展示の記録…………… 90

表紙題字・成瀬の文字は創立者の自署 カット・江口まひろ

## 創立一二〇周年に向けて新たな日本女子大学を目指す

日本女子大学学長  
成瀬記念館館長

蟻川芳子

昨年本学は創立一二〇周年を迎え、一月一九日に記念式典と祝賀会を催しました。一一〇周年は特に記念事業は行わず、次の一二〇周年に向けての「教育改革」を始動することともに、「Vision 120」を公表する方向で準備を進めてまいりました。昨今、日本の大学教育を取り巻く環境は厳しく、さまざまな改善が求められています。その中でも、グローバル社会に対応できる人材の育成は、大学教育の根幹に関わるものといえます。本学では前学長後藤祥子先生がご在任中から、西生田キャンパスの移転が議論されておりましたが、中・長期計画の見直しを行うなかで、二〇〇九年度に大学将来構想委員会を立ち上げ、二〇一〇年三月の理事会で「今後の学部、大学院の再編は目白地区で行う」ことが承認されました。二〇一〇年度より理事会の下に学園総合計画委員会を置き、抜本的な教育改革を創立一二〇周年の記念事業とすることで検討が始まりました。

教育改革にあたって、今後の教育を創立者の建学の精神を今に活かした方向で行うことを確認し、女子を「人として、婦人（女性）として、国民（社会人）として」の三方向から教育を行うという建学の精神を基に、本学が育成する学生像を描きました。それは、一、幅広い教養と豊かな人間性を備え自分の信念をもって行動できる人、二、個性と能力を発揮し自らすすんで社会の発展に貢献できる人、三、高い専門的知識を身につけ国際的視野がもてる人としました。「女性として」の対応は議論を重ねた上で敢えて「女性」という言葉は使わず、女性としての特性あるいは特徴を「各人の個性と能力」としてこれに充てています。

現在社会が求める人材とは、専門性を問う前に幅広い教養と外国語が身につけている人物がまず挙げられます。学部の再編を目白地区で行うとしたのも、人間生活科学系・人文科学系・社会科学系・自然科学系の四学部の教員の総合力を活かした基盤的な教育に取り組むことで、本学の特徴と強みを十分に発揮しようと企てたことにあります。従来の教養科目の柱である人文・社会・自然科学に、本学では人間生活科学を加えることによって教養教育の幅が広がり、人間生活をよりよく理解して自己の生き方や社会貢献に役立てることが期待されます。近年私の属する日本化学会においても、先端科学技術の目的が「環境と安全な生活の共生を目指す持続的発展」というように、生活に視点が置かれています。

また語学教育に力を入れることは、各大学でさまざまに取り組みがなされていますが、学生数において中規模である本学では、全学的に今以上のきめ細かなカリキュラムが組めるものと、プログラムを検討しています。特にこの語学教育は大学のみの改革ではなく、日本女子大学の一貫教育として取り組むことになりました。各段階で到達度を設定し、学生に語学、特に英語力の自信をつけて社会に送りだそうと考えています。

目白地区で全学の教育を行うことにより、専門教育の見直しも必要となります。学科間の重複をできるだけ避け、教員の力を有効に活用して特徴ある専門教育の展開を試みる計画です。目下、このようなアカデミックプランの検討を主軸に、目白キャンパスの整備及び西生田キャンパスの有効活用について部会を立ち上げていますが、西生田キャンパスは地域との連携を活かしたさまざまな大学活動、外国語研修または新しい研究拠点の場として、目白キャンパスと相補的に学園の教育・研究活動を支えていくこととなります。創立一二〇周年には、新しい日本女子大学が誕生いたします。

## 上代タノ先生に学ぶ

## 原 育子

全国的に高齢化が進む中、夢と希望をもち誰もが安心して暮らせる社会作りは女性の力で！女性の豊かな感性と優しさで町を明るくして行こう、そして出来ることから始めよう！と「環境保全、啓発、顕彰活動」を柱に二〇〇〇（平成一二）年四月、「大東町の女性の集い」を結成した。地域に残る古い因習や男尊女卑の傾向は未だ拭い切れない面があり、住民の意識改革の必要性を感じるとともに、男女共同参画の現代社会を生きるためには女性が賢くならねばと試行錯誤していた。

大東下分出身の上代タノ先生の故



朗読劇「郷土の誇り 上代たの」

郷であるのにどうしたことか、地元の大東では先生の偉業は殆ど知られていないことを思い、先ず上代タノ先生を知ろう！多くの町内外の人々にも知って貰おう、そして小学生の子どもたちにも！「大東町の女性の集い」の会員たちも深く知ろうと、島根史学会会長の池橋達雄氏、町誌

編纂委員の松田勉氏、親戚筋の筒井英雄氏等の講演を聞く勉強会を開いた。

上代タノ先生は特に女子教育について、これからの女性には裁縫や花嫁修業のような習い事だけではなく、本当の人間教育の必要性を述べておられる。

「日本の将来を支配すべき婦人の精神力は盲目的、雷同の態度からは生まれぬ、幾世紀待っても無から有を生じぬ、作らずして完成されませぬ。我々は先づ問題に直面して虚心坦懐、我々自身が殆ど本能的に持つて居る道徳的観念または判断に訴えてみることを実行しなければなりません。」云々と述べておられる。これが「大東町の女性の集い」の進むべき道であると感じた。

上代タノ先生は一八八六（明治一九）年七月三日理解ある両親の許に生まれ、川遊びが大好きな天真爛漫





上代タノ顕彰碑

え、奇しくも平和六〇年のよき日、二〇〇五（平成一七）年一月二三日、町役場の許可を得て大東町の「悠々広場」に上代タノ先生の顕彰碑建立序幕の式典を挙げた。末永く郷土の誇りとして後世に伝えていく所存である。石碑の文字は先生の教え子である書家陶山由利子氏の揮毫に依る。

二〇〇六（平成一八）年七月三日、上代タノ生誕一二〇年の墓参と顕彰碑建立に合わせて日本女子大学学長後藤祥子氏（当時）、藤枝修子氏が来町され、「大東町の女性の集い」の会員らと歓談することが出来た。

更に二〇〇七（平成一九）年二月、顕彰碑建立一周年には再び後藤祥子学長を招き、大東高校に於いて高校生、一般町民に向けて「日本の未来のために」と題しご講演をいただいた。

「大東町の女性の集い」では、町内小学校を訪問し、上代タノ先生の朗読劇発表を続けている。

先生を学んで一〇年、これからも平和をめざし人にやさしく、故郷を愛された先生を学び続けたい。

「大東町の女性の集い」顧問

はら いくこ

## 絵絣展、藍に生きて

福井 貞子

二〇一二（平成二四）年の新春から成瀬記念館で開催の「絵絣展、藍に生きて」に召喚された私は、傘寿記念の夢のような出来事で名誉な事になりました。

貧しい農婦の私が日本女子大学通信教育部に入学し、成瀬仁蔵先生の教育理念を学んだことが人生の出发点となりました。「女性を自立できる人間にする」——この尊い教えは、どん底で苦悶していた私にとって、体の鱗を一枚ずつ剥す努力によって人魚から女体に生まれ変わり、希望の光に向かって歩む力になったと確信しています。



来館した平井伸治鳥取県知事（左）と福井貞子氏、蟻川芳子学長

私は東京大学に進んだ実兄の影響で学問の道に憧れながらも一九歳で嫁ぎ、封建的な家父長制三世同居の大家族の農家の一員になりました。そして女性の立場の弱さと悲哀——黙って働き、労働力で評価され、人に従う事のみ美德とされ、知性を鍛える読書も許されず、自分の意見を述べることは余計なこと、

「黙って領き笑顔を見せる」まるで人形のような女性が求められる世界——の中でもがき苦しんでいました。

家のために犠牲的に尽くす没個性の女性から目覚めて、この谷間から自分で這い上がらねばならない。農村の嫁の立場でありながら煩悶の末、「学ぶ」ことを心に決め、木綿の修業と重ね合わせて歩んだ半世紀でした。私にこの下積体験があったから、学習にも一段と力が入り、向学心に燃えていました。その私に卒業を前にした軽井沢総合面接で第六代学長上代タノ氏は「勉強を続けて深く知識を得るために家政学会に入り研究することを勧めます、貴女はきつと出来る人ですよ。」と言って送り出して下さいました。この言葉に励まされ、日本家政学会に一五年間在籍し、研究発表と記録する事の大切さを学びました。

木綿と女性について聞き取りをす

の中で明らかになったことは、明治、大正期の紡績産業の生産革命の担い手として機工場の労働者であった少女たち、情熱と勤勉な忍耐力、創造力を培った彼女たちが、一旦家の中に納まると、男尊女卑の思想に染まつてしまう、ということでした。女性たちは木綿という産物によって自分の才能を伸ばし、自信を持ち経済力も左右しました。女性史の中でも彼女たちが木綿に関わった事実は切り離せない。女性たちが社会的生産者として重要な役割を果たした事によって現代社会があるのです。彼女たちは絵紺の目に見えない所に技と心を織り込み、伝統を繋ぎ止めました。緋織り労働に屈従した女性たちは、過酷な労働の寸暇を惜しみ夜なべに繊細で精巧な緋を織り続けたのです。彼女たちは無名で一生を終え、その死の淵にあって昭和三〇〜四〇年代の高度経済成長期の木綿不用品

という社会的風潮に嘆き苦しみました。私は、在野の老女たちを取材し、絵絣を譲り受け、織り秘伝を学ばせてもらい、標本資料を研究調査して「倉吉絣文様の変遷と特徴」と題して家政学会で発表しました。

絵糸を織り重ねて糸で絣文様を表わす手工芸は在野の女性たちが生み出した芸術であり、日本の誇る工芸の原点です。家庭の中が芸術活動の場であり、機ノ音で家族を束ねてきた。こうした在来の女性と木綿とのかかわりを『ものと人間の文化史 木綿口伝』（法政大学出版局）として発表し、木綿の尊さと女性の偉大さを発掘し公表してきました。そして収集した絵絣は郷土の誇る宝物。文化財として次の世代に渡す事になります。

「絣を遺して」と遺言した数多くの老女たちに背中を押され、今回の「絵絣展」が実現しました。収集し

た古布には、一世紀前の女性たちの高度の技と愛情溢れる心と吉祥の祈りが込められています。私とその絣文化の橋渡しをさせてもらい、代弁者としての役割を底力から支えたいと思っています。

成瀬記念館での「絵絣展」は、山陰地方の女性を成瀬先生が引き上げて下さり、今こそ「自発創生」をお論じされたような気がしてたまりません。展示する絵絣古布の秀逸品と並べて自作絵絣も飾り、恥を知りながら、五〇余年木綿再生にかけた私の人生と習作を『倉吉がすり』私家版No.2として出版しました。その勇氣は、絣文化を広め伝えたい心からの願望から生まれたもので、老後の蓄えを注ぎ込みました。残された時間を絣文化の担い手として若い方たちと共に学び、謳歌した生き方をしたいと願っています。

（一九六二年通信教育部生活芸術科卒業・鳥取県無形文化財保持者）

ふくい さだこ

## 広島県新庄学園訪問記 — 成瀬校長の蒔いた種 —

後藤 祥子

昨春秋、図らずも桜楓会広島支部の招きを受けて訪広した折、これは得がたい機会だと直感した。前々から懸案になっていた、広島県新庄学園を訪ねてみたいという一念である。新庄学園は広島市北方の高地にあり、今からちょうど百年前に創設された中等教育の聖地。あえて聖地などと呼ぶのは、教育の真骨頂はこれだ、と訪問者を納得させるからである。

広島市から高速バスで北上して一時間、島根県の浜田市へ抜ける中国山脈の中腹に、新庄は位置する。以前、この学園経営に当たられる大先輩の宮庄ミツヨ氏から、令嬢の竹平孝子氏お手製の季節の花に彩られた絵はがきを頂いて以来、ずっと気に掛かっていた所であった。何故それほどにもこの地に惹きつけられたのか、その由来に今回初めて気づかされた。もつと早くに、ミツヨ女史のご生前に伺うべきであった、と自分の迂闊さに臍を噛む思いだが、遅ればせながら、お尋ねした甲斐があった、その報告である。

バス停まで、宮庄良行理事長が自ら迎えに出て下さり、初対面とは思えぬ懐かしさを覚えながら学園に伺うと、なんと理事長室の鴨居には、見覚えのある「信念徹底」の額が掲げてあるではないか。レプリカなどではない、紛れもなく直筆の、そし

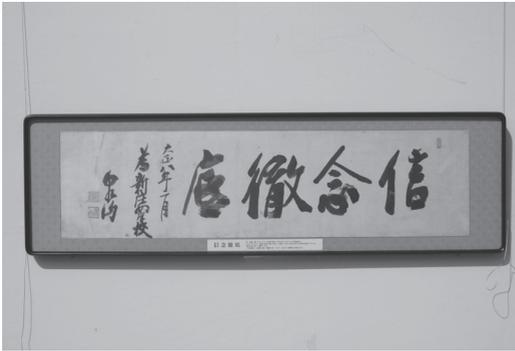
て見慣れた三綱領のそれと寸分違わぬ(但し「為新庄女学校」の添書がある)額の有様に、同行の山中理事とひとしきり感激しながら、約一世紀前の学園創設時に、成瀬校長によって送り込まれた豊留アサ女史(旧制六国)の逸話を、あらためて伺うことになる。

豊留アサという人の赴任の状況を、『創立百年 新庄学園史』は次のように伝えている。

講堂での講義の終わりにあたって、成瀬仁蔵氏から、「このたび広島県の北部一山村に、かくかくの趣旨で新庄女学校が創立される。そこへ骨を埋める覚悟で行く者はいないか」と問われた時、「私が参りましょう」と唯一人、敢然と応じられたと言われる。その時、女史は未だ二八歳。明治三十二年に鹿児島師範学校を卒業し、鹿児島におい

て七年間小学校教員を勤め、なお進んで高度な教育を求めて上京し、当時、高等女子教育では日本唯一の存在であった日本女子大学校国文科に学ばれていた女史は卒業後直ちに来校し、四月七日小雪の降る中に人力車に乗って着任した。

爾来女史は、教諭として同郷の鎌田信という女性と二人で学園の教育に当たり、着任の二年後には初代校長の急逝を受けて三〇歳で二代目校長に就任、昭和十三年に亡くなるまで三〇年、学園の発展に尽くしたと言われる。『家庭週報』の昭和十三年三月一八日号には、「豊留朝子姉逝く」の見出しで、殊に親交の厚かった仁科節氏の甲文を載せる。実は『家庭週報』には、それに先だって、昭和二年二―三月の連載記事「ある山村の女学校」や翌三年三月には「訪問記 春陽寮を訪ねて」が載り、



成瀬の揮毫「信念徹底」

豊留氏の教育事業への関心が強かった様子が窺われる（春陽寮は目白に出来た、上京生徒の宿舍。後に触れる谷山学園長の肝煎りか）。

所で「信念徹底」の書は、大正八年二月の日付まで本学のものと同じく、成瀬校長の重篤を案じて、豊留アサ女史が山を下り、はるばる上京

して恩師の枕頭に侍した経緯を、これも『創立百年 新庄学園史』は記している。

学園の理事長室にはさらに七絶の一額が掲げられている。三綱領と同じ時期に揮毫され、成瀬校長の逝去後、その遺志の継承者たちに贈られたレプリカの一つである。「天心の自念身心に盈ち」に始まるこの詩句の心は、学園が大切にする豊留アサ女史の遺訓「我は吾自らの光の中に生きん」に再生される。そして、この一連の言葉を通して三綱領の精神が今なお、新庄学園に息づいていることは、二〇〇〇年七月発行の広報誌『私学新庄』に、当時校長の職にあった宮庄理事長が説かれる所でもある。自己の内面に漲る確固とした信念を柱に突き進むのが豊留アサ女史の信条で、学園の非常時にあっても強力に皆を牽引した逸話が残る。ちなみに、アサ女史の忌日は三月四

日で、生涯を貫く性格の激しさは、こんな所にも因縁を感じさせる\*。

豊留アサ女史の生涯を大きく領導したもう一人の人物が、「天心自念」の額の左に肖像画の懸かる谷山初七郎氏で、学園が高等女学校と中学校を併せて統括することになった大正一五年、懇請されて初代学園長に就任した人である。第一高等学校教授兼生徒監であった谷山氏は、もとアサ女史の郷里の恩師、そして鹿児島から日本女子大学校への遊学を強く勧めた人でもあった。谷山氏は東京にあって、文部省や広島県などの諸官庁との折衝や、上京する生徒達のために宿舍を開設するなど、何くれと厚い支援を加えたが、自ら学園に赴くことの出来ない代わりに、一高の卒業生たちが岡田三郎助に描かせた肖像画をこの地にもたらしただ

\* 日本女子大学の創立者成瀬仁蔵は一九一九年三月四日に没している。



「天心自然」の額と谷山初七郎の肖像。竹平孝子氏(左)と筆者

という。実は帰京後、校長の日高敬司先生から学園歌のCDをお送り頂いた時に、女子寮第一寮歌の節回しが「ああ玉杯」なのに驚いたのだった。谷山氏の存在は、成瀬校長と同じく、豊留女史の根底を支えている。二〇世紀の前半という早い時期に、若い女性が強い信念を持って事業を完遂できた背景には、こうい

かりした背骨の支えのあったことを思わずには居られない。

理事長室の歴史のお宝拝見の後、理事長・校長お二方のご案内で学園を、また理事長令妹の竹平さん(新一五国)のご案内で女子寮を見せて頂いた。教室や構内はお掃除どきで、先生と生徒が一緒になって掃除に励んでいる風景は羨ましい。校長先生が一人一人に声を掛けられる。毎年新入生は二百人ほどで、全部覚えてしまわれるのだという。しかも、親兄弟一族が学園の気風を慕って子弟を送り込んで来るので、誰そのの弟妹、子や孫といった関係まで頭に入って居られる様子。学寮も親兄弟が経験していいから勧める、という具合。女子寮には「お主婦様」が生きていて、実に楽しんでる。実は、女子寮のホールには、見事な紙細工が飾られていて、豊留アサ女史の養女となった姪のご子孫がアーティス

トとして贈られたものだという。女子寮の舎監の佐々木真理先生にはお会い出来なかつたが、シンガーソングライターでもある真理先生の最新のCDも例の寮歌と一緒に、校長先生からは送られてきたのだった。見学の途中では、昨年は男子部が高校野球で広島代表に出る直前まで善戦し、惜敗した直後で、捲土重来に向けて運動場に急ぐ勇姿も垣間見たのだった。歴史と現代が自在に往還する聖地である。

(一般社団法人日本女子大学教育文化振興桜楓会理事長

ごとう しょうこ)

## 研究ノート

# E・P・ヒューズの *English Literature for Japanese Students* と成瀬仁蔵

白井 堯子

### 一 はじめに

日本女子大学校創設時の教育と創立者成瀬仁蔵の教育理念を考える時、アメリカの女子高等教育の影響がしばしば語られる。しかし、当時最大の文明国とみなされていたイギリスのそれについては、触れられることはほとんどない。

本稿では、日本女子大学校の開学の年一九〇一（明治三四）年に来日してこの学校の英文学部（当時の名称）の教育に力を注いだだけでなく、校長成瀬（四三歳）の良き相談相手となったイギリスにおける女子高等教育のバイオニアE・P・ヒューズ（Elizabeth Phillips Hughes 1851-1925, 来日時五〇歳）の著書 *English Literature for*

*Japanese Students* (Tokyo: Z.P.Manrya, 1902) を紹介し、成瀬がこの書にどのような関心を示したかについて記したい。

ヒューズについては、筆者はすでに幾つかのペーパーを発表している<sup>2</sup>ので、以下に彼女の経歴や成瀬との関わりについて簡単に述べる。

### 二 ヒューズと成瀬

ヒューズは、一八五一年六月南ウエイルズの小さな町 Cumrathen で生まれた。父親は医師であったが、同時にウエイルズの中学校的の理事や教育委員会の議長などを務めた人で、彼女は、のちに著名なメソジストの牧

師・社会改革者となった兄の Hugh Price Hughes と共に、教育熱心な家庭に育った。母親は表現力が豊かで機知に富んだ言葉があふれ出るエネルギッシュな女性であり、彼女も兄もこの母親からその才気、エネルギー、そして活発さを受け継いだと言われている。<sup>③</sup>

彼女はウエイルズの Taunton にあるホープ・ハウス (Hope House) という私立の学校で中等教育を受け、さらに一八七六年 (二五歳) にイングリランドで最も古い女子パブリック・スクールの一つチェルトナム・レイディズ・コレッジ (Cheltenham Ladies' College) に一年間だけ籍を置いて勉強を続け、翌年この学校の教育助手となった。そして、この学校の校長でイギリスの女子教育の大御所ビール<sup>④</sup> (Dorothea Beale) の女子教育に献身する偉大な姿に接して感銘を受けている。



E.P. ヒューズ (1851-1925)  
『英国風俗』(知新館) より

一八八一年 (三〇歳) には、ケンブリッジ大学に設立されて間もない女子コレッジの一つ、ニューナム・コレッジ (Newnham College) に入學。丁度一八八一年からケンブリッジの女子学生は、現実には学士の学位は与えられなかったが、男性と同じ条件で卒業試験を受けることができるようになり、ヒューズは一八八四年に the first class in the moral sciences という良い成績を、翌年には the second class in history を獲得した。またニューナムに席を置いたことは、新設の女子コレッジの発展のためにリーダーシップを発揮しながら活躍する有能な女性たちを知る機会にも恵まれて、彼女は在学中の一八八四年にリヴァプールで催されたエッセイコンテストで「女性の高等教育について」を発表して賞を獲得している。<sup>⑥</sup>

そのヒューズがイギリスの女子高等教育のパイオニアになったのは、どういう経緯を経てなのだろうか。

一八六四年までにイングリランドに設立された女性教師を養成する公立の機関は一八校しかなく、それも初等教育のための女性教師を育てることを目的としていた。そこで女子教育の発展のためには、女子中等教育に専心する優秀な女性教師をつくり出す必要があるという声が高まり、女性の中高等教育教師を育てるさまざまなタイプの

機関が生まれていく。

そういった中で、ケンブリッジ大学に設立された二つの女子コレッジ—前述のニューナム・コレッジとガートン・コレッジ (Girton College)—で学んだ、すなわち大学教育を受けた特別のエリート集団を、ケンブリッジという場所で女子中等教育のための優秀な教師に育てていくという提案がなされ、これが実現したのが Cambridge Training College for Women Teachers (以下CTCと記す) の設立(一八八五年)であり、その初代校長に選ばれたのが三四歳のヒューズであった。ヒューズに白羽の矢が立った理由は、彼女の大学時代の優秀な成績、チェルトナムのビール校長の下で得た四年間の教育経験、仕事に対する疲れを知らぬ献身、学生を鼓舞する能力、教師を訓練することの重要性に対する信念、進取の気性、財政・行政能力、決断力などが高く買われたためと言われている。<sup>(8)</sup>

一四人の学生と寢食を共にしながら出発したヒューズのCTCにおける生活、喜びと苦労、その発展、社会における評価などについては、*Teacher Training at Cambridge—The Initiatives of Oscar Browning and Elizabeth Hughes by Pam Hirsch and Mark McBeth* (London: Woburn Press, 2004) を参照されたい。

開学して六年目の一八九一年の新学期にヒューズは学生たちに向けて、

われわれが発出した時のCTCの状況は、資金は乏しく、設備は貧弱で：CTCは果たして存続していけるのかしら：と思ったことを正直に申し上げましょう。：われわれが成功した理由の大きなものは、学生の力だったと確信しています。(拙訳)

と書いているが、時の経過と共に、CTCの卒業生は、さまざまな中等教育機関や教師養成機関の教師として、さらには視学官としての職を得るようになり、ヒューズはそれを大変誇りにしている。そして女子教育に関する世界会議にイギリスの代表として出席するなど国際的な活躍の増加と共に、彼女は、CTCにアメリカ、南アフリカ、オーストラリア、インド、日本などから留学生を迎えるようになった。一八九七(明治三〇)年、女子高等師範学校教師安井てつ(一九二三年には東京女子大学学長)は、文部省派遣留学生として渡英、三年間の留学中にCTCで学びヒューズから多大な影響を受けている。<sup>(9)</sup> また津田梅子もイギリス滞在中にヒューズと女子教育について語り合い、津田は、*“She is a very interesting and*

intelligent person, and I have gotten a great deal from her.'  
と書き残した。<sup>(13)</sup>

こうしてヒューズは、日本の女子高等教育推進者とも関わりを持ったのであるが、その関わりが強固なものに発展したのは、開学したばかりの日本女子大学校英文文学部の教壇に彼女が立ったことによる。

実はヒューズは一八九九年にCTCを退職し、その後CTCで教えた外国人学生を訪ねて世界を廻った。日本の土地を踏んだのは日本女子大学校創立年の一九〇一(明治三四)年の八月で、東京麹町の安井てつの家に滞在して約一五ヵ月間精力的に学校視察や講演を行っていた。<sup>(14)</sup> そうした活動の中でも彼女が最もエネルギーを注いだのは、日本女子大学校における教育であった。その体験を彼女は次のようにチェルトナムのビル校長とCTCの卒業生たちに書き送っている(以下拙訳による)。

日本女性にイギリス文学を教えるのは、めったに味わえない興味深い経験です。彼女たちは熱心で、すべてが彼女たちにとって新鮮なのです。私にとっては、新しい発見の連続です。(一九〇二年四月)<sup>(15)</sup>

私が特に責任をもたされている英文学部には、三

九人の学生がいます。私はこの学校で週に二日間四時間ずつ講義をしているのです。私たちはイギリス文学や英語の勉強をしながら、大変楽しい時を過ごします。私たちが週に一度アーサー王の物語の勉強に没頭していると聞いたらCTCのケルト人の卒業生は喜ぶことでしょう。この話は日本の昔話にいろいろな点で似ているので、学生たちは楽に理解してくれます。<sup>(16)</sup> (日付不明)

成瀬記念館には、滞日中のヒューズが成瀬に宛てた書簡が何通か保存されている。その内容は、英文学部の学生に英語を話す機会を与えるためにイギリスの女性を学内に招いてイギリス風の茶会を開きたいとか、日本女性の話題はあまりにも安易だから、学生を広い視野を持つ「世界市民」に育てるために英字新聞を購入してほしいとかいうもので、彼女がいかに学生の教育に心を砕いていたかを伝えている。

ヒューズは成瀬にも多くの刺激を与えたようだ。成瀬の支持者渋沢栄一が「女子教育は如何なる考えをもつていくべきかは私共(成瀬と渋沢)の始終問題となった事でありますが、或る時英人ミスヒューズからかの国に於ける教育の状態を聞き、必ずそこまで進めたいと私も考

Sunday afternoon  
 4344  
 Dear Mr. Chace  
 I am glad to hear that you  
 have been able to give the students  
 in the English Department so many  
 opportunities of speaking  
 English. I am sure that it will  
 be a most profitable thing for them  
 to do at college next Saturday  
 afternoon 3 P.M. I think  
 it would make a custom of  
 English & American  
 I wish the students of the English  
 Department to help me in this.

I had a very good time this morning that was  
 very glad to be there.  
 With kind regards  
 your truly  
 J. H. Hughes.

Mrs. J. H. Hughes and the  
 students of the English Department  
 At Home  
 Saturday the 10th  
 of September. Perhaps you  
 would compile with the students  
 to have know of the date will  
 suit them.  
 It must have been a  
 great qualification to go

ヒューズの成瀬宛書簡

へました<sup>17)</sup>と成瀬への追悼文の中で記していることからも、それは窺える。

実際成瀬は著述の中にヒューズの名前や彼女の考えを何度か書いており、たとえば成瀬の代表作の一つ『女子教育改善意見』<sup>18)</sup>一九一八「大正七」年において、ヒューズの名前が四回登場し、ヒューズの家

政学についての考え、すなわち家政学は家庭建設の専門学であり、家政の技術は他の多くの技術を総合して成り立ち、生活を豊かにして賃金の価値を高め、国家の富力に大きな影響を与えるので教育的価値が高い、という説を紹介している<sup>19)</sup>。また同書の中で成瀬は、男女の能力、人格には差がないこと、女性は男性と同様にいくつになっても進歩発展する能力を有し、その権利があると述べ、それは私見ではなく、ヒューズも同一の意見を発表していると、ここでもヒューズの名前を記した<sup>20)</sup>。

そして、成瀬の蔵書の中には、ヒューズから贈られた彼女の左記の著書があり、それには成瀬によってアンダーラインや文字が書き込まれ、成瀬の精読ぶりが偲ばれる。

ここでは、このヒューズの著書の内容と、成瀬がヒューズのどのような考えに関心を抱いたのかを記したい。

三 ヒューズの *English Literature for Japanese Students*  
 ヒューズのこの著書は、現在の丸善の前身、丸屋から出版されている。発行年は一九〇二（明治三五）年七月七日、すなわち日本女子大学校創立の翌年であるから、この書は、おそらくヒューズが日本女子大学校英文学部の教壇に立ってイギリス文学を教えた時の経験が土台に

なっているのだろう。実際、イギリス文学を学ぶ女子学生を念頭において記した文章が少なくない。

本の大きさは縦二〇センチ、横一五センチで、定価は四〇銭。頁数は二一七頁で、第一部（一一七三頁）と第二部（七三―二七頁）に分けられている。第一部はヒューズの論文で、タイトルは *On the Teaching of English Literature to Japanese Students*（日本人学生にイギリス文学を教えることについて）、第二部はヒューズがつくったイギリス文学の作家名リストと彼らの作品の抜粋から成り立つ。

ここでは、その第一部の内容を紙面が許す限り紹介しよう（見出しは白井による）。

### ①文学作品から何を得るか

人間は交際相手から多大な影響を受ける。それと同じように、人生を鋭く観察し人生の真の意味を深く理解している作家の文学作品からは得るもの大きい。特に何世紀にもわたって高く評価されてきた珠玉の文学作品からは、精神的、道徳的に豊かなものを学ぶことができる。それゆえ、文学を教える教師が作品の解説、言葉や引喩などの説明をするだけで、学生に作品の持つ深い思想、その思想の人生とのか、わりを考えさせないとしたら、

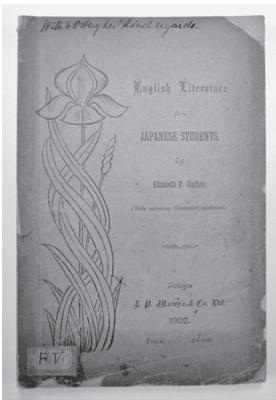
文学を教えても学生の精神の発達に影響を及ぼすことはできないだろう。

良き文学作品は、われわれの精神に力を与えるのだ。

### ②女子学生は文学作品から何を得るか

文学作品から何を学ぶかを考える時に重要なことは、文学の勉強は女子学生にとって特に価値あるものだ、という認識である。

女性は、男性に比べて、多面的で豊かな人生経験を持つことから切り離されている。東洋では、特にそうだ。家庭の中にいる女性は、その仕事の性質上隔離された生活をしているので、女性にとっては、書物こそが家庭の外の世界（outer world）におけるものの考え方、家庭の外の世界の生活を見ることを可能にする窓なのだ。母親



**English Literature for Japanese Students**

は、子供たちは、が外の世界で生活できるように準備してやらねばいけないし、妻は夫が活躍

する外の世界を知的に理解し、その世界に共感できるようにならなければならないのである。

女性は、文学を知的に学ぶことによって、自分の家庭の義務を正しく果たすための知識を得ることができ、夫の知的な良き伴侶、子供にとつても知的な良き母親となるためには、妻や母親の精神には絶えず深い思想が注がれていなければならない。それは、文学作品を読むことによって与えられる。家庭にある蔵書を妻や母親が活用しないならば、家族間の絆は切れてしまうだろう。

### ③日本人学生がイギリス文学を学ぶ利点

他国の文学作品をその国の言語で読み、その国の思想を知ることが、自国の文学作品と自国の言語、自国の思想をより深く理解することにつながる。また、他国の文学作品を読むことによってわれわれの知識は拡がり、他国への関心と共感が増し、われわれは「世界市民 (citizens of the world)」となっていく。「世界市民」はより高い教育を受けることによってのみ生まれるので、現代では、一つの言語、自国の文学作品しか知らない人は、教育レベルの高い人とは見なされない。

日本人学生が学ぶ第二言語は英語であるから、日本人学生は必然的にその英語力を使ってイギリス文学を学ぶ

ことになる。ここで先ず、英語を学ぶことが日本人学生にとつていかに優利であるかを述べると、

**a** 英語は、商業や旅行において、かつての共通言語であったラテン語の地位を占める言語である。

**b** 英語は、見事な発展を遂げ世界の重要国となった国―大英帝国と共和国であるアメリカ―で使われている言語である。

**c** 英語は、柔軟性に富み豊かな表現手段となる言語である。

**d** 英語は国民性を強烈に持っている言語なので、イギリス人の国民生活の多くが英語の中に具体化されている。

イギリス文学に関して言えば、イギリス文学は西洋文学の中でも最高のもの一つであり、千年間の長きにわたり発展し、その生誕の地でもなお新鮮な花を咲かせている。

イギリス文学は次のような特徴を持ち、その特徴はイギリス文学を一層価値あるものにしていく。

**a** 特徴の大きなものとして、それは道徳的であるということ。イングランドの道徳教育は、イギリス文学の作品を通して教えられている。

**b** 文学的な美しさを備え、多くの場面で繊細で優し

い感情を示している。

c 深さ、真面目さ、公民としての義務感、責任、不屈、自己犠牲、抑制、公正さ、完全さ、正しいことにおける粘り強い頑固さ、冒険好きなど、イギリス人の性格を示している。

ここに列挙した三つの特徴は、チャウサー (G. Chaucer, 1340-1400) からブラウニング (R. Browning, 1812-1889) に至る彼らの作品の中に確認することができ、それは、各作品を魅惑的なものにしていく。

イギリス文学を知的に学ぶことは、イギリス人の特性と生活を理解する最上の方法であり、日本人学生にとって価値があることだ。

④日本の女子学生はイギリス文学を学ぶべきだ

日本の女子学生はイギリス文学を学ぶべきだ、と述べる理由は三つある。

a イギリス文学の大部分は女子学生が読んでも批難されることのない、道徳的な内容である。

b 一九世紀に西洋の女性は大きく進歩しており、イングランド女性の進歩は、摩擦を起こすことなく、まれなるほどの成功をみた。それは、リーダーになった女性たちの英知、自己抑制、自己犠牲のお蔭であり、また男

性たちが援助を惜しまなかったから、と言えるが、何よりも女性たちが、慎重、優しさなどを失うことなく、教育、責任、自由の順番に力を獲得したためであろう。もしもこの順番が逆であつたら、さまざまな困難が生じたと思われる。彼女たちがなぜ多くのものを獲得し、少ししか失わなかったかは、現代のイギリス文学の作品の中にはつきりと見出せる。イギリスの女性たちが歩んだ道をこれから歩もうとしている日本女性は、特にイギリス文学作品を読むべきだ。

c 日本においても生活、経済、商業の発達に伴い、女性には家庭の外でも活躍してほしいという要求が、これからは強まるであろう。その時、英語・イギリス文学を学んだ女性たちは、価値ある仕事を手にすることができる。ジャーナリズムにおける仕事、イギリス文学の作品の翻訳などを、女性の視点を入れて行うことができるのだ。もちろん彼女たちは、日本語を磨くことも忘れてはならない。

⑤イギリス文学の作品をどのように教えるか

イギリス文学の作品を第一級の翻訳書を使って教える方法と、翻訳ではなく原書を使って教える方法と二つの教え方があるが、イギリス文学を学ぶ初歩のコースにお

いては、それが立派な日本語訳であるならば翻訳書を使つてもよいだろう。しかし、翻訳書というのは、どんなに優れたものであつても多くを失っている。それゆゑ、ある程度の英語力を身につけた学生に対しては文学作品は原書で読まなければいけないこと、決して自国の言葉に翻訳してはならないことを強調していくことが大切。学生は、原語を通して作家の思想を理解しなければならぬ。

日本の教室では原文を翻訳しながら講義をしている先生がいるが、それでは、学生の英語の知識を増すこともならないし、原書を使つて作品を味わう訓練にもならない。教師は、適格な援助を与えながら、学生にイギリス文学の作品を翻訳することなくそのままの形で読む習慣をゆつくりとつくつてやらねばならない。英語で書かれた医学や法律の専門書の内容を学生が知りたいと思つ時には、日本語に翻訳しながらその内容を理解していくのもよいだろう。しかし、外国文学を専攻する学生は、翻訳された日本語の文章を通してではなく、原書を読んで原語の持つ力、ニュアンス、日本語とは異なる表現の味わい、日本人とは異なる知的な立脚点を感じとらなければならぬ。

従つてイギリス文学を教える教師は、英語という言葉

について深い知識と鋭い感覚を持たなければならない。教師が英文のテキストを日本語に翻訳して講義を進めるのであれば、学生は多くを身につけることはできないし、家に帰つてもイギリス文学の書をひもとくことをしないであろう。

教師は、英語についてはもとより、イギリス文学についても適切な知識を所有しなければならない。過去五百年間のイギリス文学の発展についての知識、そしてイギリス文学の源であるイギリスの生活についての知識も必要だ。

一番よいのはイギリスで生活する経験を持つことだが、それはなかなか困難であろうから、日本の中で自分いろいろ教えてくれる指導者を得るとよいだろう。英語とイギリス文学について深い知識を持ち、英語の発音なども直してくれるような指導者、イギリスの生活・歴史・文化などについて有益な話をしてくれる人を。しかし指導を受けると言つても、教師は自分のクラスについては完全に責任を持ち、場合によっては、その指導者の助言を断わる自由を持つていなければならない。

#### ⑥イギリス文学演習室をつくる

イギリス文学を学ぶ学生のために、イギリス文学演習

室 (Literature Laboratory) をつくることが必須である。

その部屋は温い雰囲気にあふれ、壁にはイギリス文学とかわる、あるいはイギリスの生活が感じられる絵画をかけることよ。

学生に対して系統立ったイギリス文学の教育をするためには、その部屋に次のようなイギリス文学の書物と関連書を並べることが重要。特に大切なことは、書物の配列の仕方である。

(セクションA) 偉大なる詩人の作品。さまざまな理由でイギリスの詩は、散文よりも優れているから詩のセクションをつくる。詩人のアーノルド (Matthew Arnold) は、*“By nothing is England so glorious as by her poetry.”* と述べている。

(セクションB) 特別偉大なる散文作家の作品。現代英語で書かれているもの。

(セクションC) 『一選集』といったもの。

(セクションD) 文学者の伝記。Boswell's *Life of Samuel Johnson*, Mrs. Gaskell's *Life of Charlotte Brontë* など文学的価値の高いもの。

(セクションF) 二、三種のイギリス文学史。少なくとも一種は外国人の眼で書かれたもの。たとえばフランズ人の歴史家 H.A. Taine の *History of English Literature*。

(セクションG) 英語史。

(セクションH) 二、三種のイングランド史。それぞれ違った見解を示しているものがよい。イギリス文学を理解するためには、イギリスの歴史についての知識が必要。イギリス文学は、強い愛国心によって生み出されていることがある。

(セクションR) 参考文献。少なくとも二種類の新しい良い辞書、地図、百科事典。

(セクションN) 小説。小説を読むことによってイギリスの思想や生活が理解できるし、容易に英語の語彙をふやすことができる。

(セクションK) ギリシャ・ラテンの作品の英訳本。英語によらないヨーロッパ文学の英訳本。

(セクションT) イギリス文学の日本語訳。イギリス文学を学ぶ初期段階においては、日本語による翻訳本は役立つ。

演習室の責任は、イギリス文学を教える教師が引き受ける。しかしこの部屋は、あくまでも学生の個人的な勉強のために使われることが望ましい。

⑦イギリス文学を理解するための基礎知識

英語をかなりよく読めても、真の意味でイギリス文学

を理解できない日本人が多くいることを発見した時には、最初、驚いてしまった。イギリス文学を味わうためには、英語の知識以上のものが必要とされる。

それは第一番目に、イギリスの生活の中に流れる根本的な原理とイギリスの生活を成立させている主要な条件を知っているということである。これは日本にいても獲得できるだろう。

第二番目にイギリス文学の源となったものについてよく知っていることが大切。イギリス文学の源となったものは、

**a** ギリシャ思想とギリシャ文学（物語）。ローマはギリシャの影響を深く受けたので、一六世紀以来、イングランドの最高の教育は、ギリシャ思想によって支配されてきた。それゆえ、イギリス文学を真に理解するためには、ギリシャの物語についての知識が必要。

**b** バイブル。過去半世紀の間にバイブルを読むイギリス人は大きく拡がっている。バイブルはイギリス文学に輝かしき光を与え、大変影響を及ぼしてきたので、文学的な見地からみても、バイブルについての知識はイギリス文学を明快に理解するためには必須のものと見えよう。

**c** アーサー王伝説にかかわる物語。これらの物語は

西洋における騎士道の最高の理想を表しており、これらの物語についての知識は、イギリスの理想とイギリス文学の上にきらめく光を投げる。そしてまた、これらの物語は、冒険を愛する心、名誉を重んじる心、向こう見ずとも言える勇敢さ、忠誠、自制などイギリス人の持つ性格の側面を強調しており、その性格には、恐らく日本人も容易に共感できるだろう。というのは、この性格は、日本のサムライ、中世の西洋の騎士、そして現代のイギリス紳士を特徴づけているものだから。アーサー王物語は、日本文学とイギリス文学をつなぐ価値あるリンクであり、日本人学生がイギリス文学を勉強する時には、この物語から出発するのが効果的と思われる。

#### ⑧セミナーの開催は有益

学生は、教師の講義を聞けばイギリス文学についてのすべての知識を得ることができると期待してはならない。個人で勉強すること、すなわち予習・復習に多くの時間をとらなければならない。

学生に力をつけさせるためには、毎週、あるいは二週間に一回、セミナーを開催することが望ましい。セミナーでは、教師と学生は講義の時とは異なった立場に立ち、異なった役目を果たす。セミナーのための勉強は学

生だけで行われる。すなわち学生はテーマや勉強法を自由に選択し、独創的な仕事を行う学者のように個人で研究を進める。教師の役目は、テーマについてヒントを与えたり、提出されたものに批評を加えたり、また学生に知識を得ることのできる場所を教えたり、学生が必要な資料を持っているかどうかを確認したりすることである。

セミナーでは学生は、自分の研究成果を順番に発表し、その発表に対してクラスのメンバーは批判したり討論したりする。それゆえ発表者は、自分の見解を守ることを学ぶ。この時教師はあくまで司会役で、最後に討論の要点をまとめ、何かあれば助言を与える。

学生の関心や能力は無限に拡がる可能性を持っているし、彼らの独創性も発展するチャンスを秘めている。だからこのセミナーは、学生と教師が力を持っているれば、かなりのレヴェルで学生の能力を伸ばすという効果をもたらす。特にこのセミナーは、文学を教えることにおいて価値がある。というのは、セミナーではさまざまな考え方、さまざまな関心、さまざまな好み、さまざまな経験、さまざまな評価が出てくるからだ。

⑨ イギリス文学を学んだ学生は、日本とイギリスの絆を強める

国にとってマナーは重要だが、しかし国の品性と英知は、国の進歩にとってマナーより価値がある。イギリスが、英語圏の外で英語を学んでいる学生に対して与えなければならぬ最上のは、優れたイギリス文学の中に具体的に示されている高貴な思想と高い理想である。

将来、日本とイギリスは、政治、商業、他の分野で共通の関心を持ち続けるだろう。イギリス文学に親しんだ日本の知的な学生の誰もが、日本とイギリスの恒久的な結びつきの中で価値多きリンクとなる。おそらく日本人学生の何人かは、イギリスの最上の本を日本語に翻訳して日本中にそれを拡め、そのリンクを強めるだろう。そしてまた、日本文学の深い思想や高い理想を英語に翻訳して、日本とイギリス、東洋と西洋の間の絆を強めるであろう。

（以上で紹介終り）

右の簡単な紹介からも明らかのように、本書は、「日本人学生にイギリス文学を教える」というテーマを掲げた時に通常予想されるものとは違った特徴を有している。それは、女子学生に対して、彼女らが英語・イギリス文学を単に教養として、あるいは嫁入り道具として学ぶのではなく、それらを学ぶことによって家庭の外の世界を

知り、イギリス文化を理解し、イギリス女性の進歩の狀態を學んで、ゆくゆくは日本女性も從属した狀態から抜け出て自立した女性になつてほしいと願うヒューズの期待が読み取れることだ。

この書には、ケンブリッジ大学で最高の教育を受け、女性教師の育成に奮闘した女子高等教育のパイオニア、ヒューズの願いが込められている。

#### 四 日本女子大学校英文学部におけるヒューズの改革

ヒューズが開学したばかりの日本女子大学校英文学部の教壇に立つてアーサー王物語を読んだことは、すでに紹介したが、その他に一体どんな試みを行ったのだろうか。それを伝える「日本女子大学校の英文学部」というタイトルの記事（『をんな』第二巻四号「大日本女学会発行、明治三五年四月」所収）があるので、それを引用しよう。

……此程またヒューズ女史も入りて之（日本女子大学校英文学部……白井）を助けらるゝこと、なりたるは前号に已に報じたる処なるが、同大学にては此度英米女子大学の制度を参照し諸種の点に於て大に改善する所ありといふ。今其要を拮めば、新に幾多の参考書を購入し、英文学部専用の自修室を設

けて、セミナーとしヒューズ嬢監督の下に英語演習の道を開き、英文学の研究に欠く可からざるアーサー王物語、希臘神話及聖書を授け、又英国現時の風俗をも教へ、会話にも普通会話の外に、時事會話を加へ、文學規範とて、英文大家の詩文の精英を抜摘して、研究の料に供し、以て彼我文牀の相異等を評論せしむるなど、従来諸学校慣用のものと少しく趣を異にする所あり。又教科書もギヤスカル夫人の文集の如き、新に外国に注文せしもの少なからざる由なり。

これを読むと、ヒューズは *English Literature for Japanese Students* の中に記したことイギリス文學演習室の設置、セミナーの開催、アーサー王物語・ギリシヤ神話・聖書の勉強、英詩の鑑賞などを日本女子大学校英文学部で実施していることがわかり、その実行力、そして彼女の提案を受け入れた成瀬の寛容さ、ヒューズに対する信頼の深さに驚かされる。

ちなみに、ここに引用した記事を掲載している『をんな』には、日本におけるヒューズの活躍ぶりのニュース、彼女の講演「近世の英国婦人」の翻訳が載せられている。

## 五 成瀬の関心

前述したように、成瀬はこのヒューズの書に、ところどころアンダーラインを引いたり、頁の余白に短い英文や日本語を書いている。それは、成瀬がヒューズのどの文章を重視したか、どのような考えに特に関心を抱いたかを示していると思われるので、ここにその主なものを記したい。

**a** 本稿の「②女子学生は文学作品から何を得るか」のところには書

き込みが多い。

先ず成瀬がア

ンダーライン

を引いたのは、

「女性は、男

性に比べて、

多面的で豊か

な人生経験を

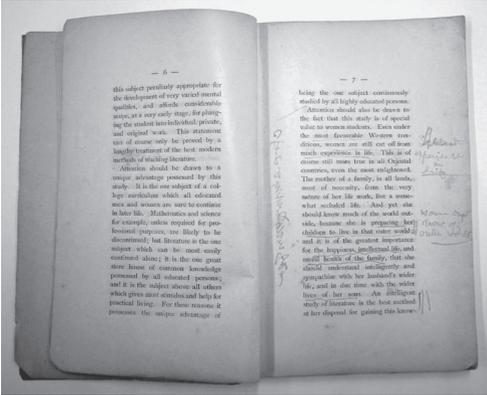
持つことから

切り離されて

いる」「母親

は、子供たち

が外の世界



English Literature for Japanese Students と成瀬による書込み

(outer world)で生活できるよう準備してやらなければならない」という文章に対してであり、その頁の余白には、英語で Pleasant experience in life. Women ought [to] know of outer world. さらに日本語で「女子も高等教育を要す」と記している。特に三重線を引いて重要視したのは、「女性にとつては、書物こそが家庭の外の世界におけるものの考え方、家庭の外の世界の世界を見ることを可能にする窓なのだ」「女性は、文学を知的に学ぶことによって、自分の家庭の義務を正しく果たすための知識を得ることができる」という文章である。

**b** 本稿の「③日本人学生がイギリス文学を学ぶ利点」のところ記されている英語についてのヒューズの記述すなわち「英語は、商業や旅行において、かつての共通言語であったラテン語の地位を占める言語である。」「英語は柔軟性に富み豊かな表現手段となる言語である」にはアンダーラインが引かれ、特に前者には三重線が引かれている。

またイギリス文学の特徴が書かれている頁の余白に、成瀬は profit of English literature と書いている。

**c** 本稿の「④日本の女子学生はイギリス文学を学ぶべきだ」のところのほとんどすべての文章にアンダーラインが引かれている。

d 本稿の「⑥イギリス文学演習室をつくる」のころのほとんどの文章にアンダーラインが引かれ、特にセクシヨンNにおいては、「小説を読むことによってイギリスの思想や生活が理解できるし、容易に英語の語彙をふやすことができる」というヒューズの文章に二重線が引かれている。

e 本稿の「⑧セミナーの開催は有益」のところの「学生は予習・復習に多くの時間をとらなければならぬ」「学生は独創的な仕事を行う学者のように個人で研究を進める」に対してアンダーラインが引かれている。

f 本稿の「⑨イギリス文学を学んだ学生は、日本とイギリスの絆を強める」のところの最後の文章「イギリス文学に親しんだ日本の知的な学生の誰もが、日本とイギリスの恒久的な結びつきの中で価値多きリンクとなる。おそらく日本人学生の何人かは、イギリスの最上の本を日本語に翻訳して日本中にそれを広め、そのリンクを強めるだろう。そしてまた、日本文学の深い思想や高い理想を英語に翻訳して、日本とイギリス、東洋と西洋の間の絆を強めるであろう」に対して成瀬は二重線を引いている。

このように成瀬が重要視したヒューズの文章に改めて注意を払うと、成瀬は、純粹にイギリス文学を味わうと

か英語の表現法やレトリックなどに興味を抱くよりは、イギリス文学を学ぶことの効用、特に女子学生がイギリス文学を学ぶと具体的にどんな効用があるか、に関心を持ったようである。また「⑥イギリス文学演習室をつくる」の文章に多くのアンダーラインが引かれているのは、前述したように、英文学部にヒューズの提案を生かして実際に演習室をつくったからであろう。

ヒューズの書に引かれたアンダーラインや読みにくい字の書き込みをみると、この書を読んでもますます日本における女子高等教育の重要性を痛感し、さまざまな思いを巡らすパイオニア成瀬仁蔵の姿が浮かび上ってくる。

最後に大変興味深い成瀬の記述について述べたい。このヒューズの著書の奥付けの裏の頁は白紙であるが、そこに成瀬は次のように記した。

Hughes' efforts

- |  |                      |
|--|----------------------|
| (1) Teaching                             | (2) Lecturing        |
| (3) Writing                              | (4) Suggesting ideas |
| (5) Showing examples, her own experience |                      |
| (6) For future by ? (判読不能)               |                      |
| (7) She became the link between          | _____                |

(6)の最後の英語は判読できず残念であるが、(7)は *She became the link between Japan and England.* であろう。成瀬はこの書を読み終えたあとに、日本におけるヒューズのエネルギーシユな奮闘ぶり (efforts) を思い起こし、これらの言葉を書いたと考えられる。

成瀬のこのメモの意味を推測すれば、次のようになるのではなからうか。

ヒューズの滞日期間は一五ヵ月という短いものであったが、日本女子大学校で教え、北海道から九州までのさまざまな教育機関を視察して講演を行い(そのテーマは、英語教育、イギリス文学の教育、絵画教育、女子の体育教育、女性の地位向上の必要性など多岐にわたっていた)、さらに本書の執筆、『英学新報』や『国民新聞』への寄稿など彼女は実に精力的であった。彼女はイギリスにおける教育経験を語り、日本の教育家にさまざまな提言を行って日本人を刺激したのだ。彼女は、まさに日本とイギリスを結びリンクとなったのである。

## 六 おわりに―教育における日英同盟

ヒューズの *English Literature for Japanese students* の前述した内容を理解するにあたって、この書が出版された一九〇二(明治三五)年七月の半年前(二月三〇日)

に、日英同盟 (Anglo-Japanese Alliance) が結ばれていたという歴史的背景を認識しておくことが必要と思われる。

日英同盟はロシアの極東進出政策に対抗するために日本とイギリスの間に結ばれた軍事同盟であるが、ヒューズが本書の中で「将来、日本とイギリスは、政治、商業、他の分野で共通の関心を持ち続けるだろう」とか「イギリス文学に親しんだ日本の知的な学生の誰もが、日本とイギリスの恒久的な結びつき (alliance) の中で価値多きリンクとなるだろう」と語る時、彼女はこの日英同盟を喜びをもつて強く意識していたのではなからうか。

それは成瀬も同じであって、すでに紹介したように、成瀬は、「ヒューズは日本とイギリスを結びリンクとなった」というメモを残しただけでなく、ヒューズの離日にあたって開催された送別会(一九〇二年九月)のために書いた「彪斯女史を送る文」<sup>(24)</sup>の中で、

此の女子の高等教育の始て唱道せらる、ときに当り我国民が面り高等教育を受けたる女子の活標本 (ロールモデル…白井) を女史に於て見るを得たるは実に女子来朝の賜なり其の大に本邦女子高等教育の前途に資せしや疑を容れざるなり……女史の体

は夫の東半球の西端に近き英国にあらんも女子の心は此の東洋の英国にあるや疑を容れず我等は女史が天祐の下に幾久しく健強にして本邦教育の爲殊に我が校の爲に尽くさるゝことの愈々多からんことを熱望して止まざるなり嗚呼政治上の日英同盟は已に政治家の手に成りぬ教育上の日英同盟は正に女史の手に成らん哉（ルビと傍点……白井）

と述べて、ヒューズの来校の意義、そして女子高等教育をめぐる日英の同盟を強調しており、興味深い。

ヒューズは、英語学・イギリス文学の専門家ではなかった。しかし彼女は、「帝国教育会英語講習会」などを中心にして全国各地で英語教育について講演を行い、帰国後も、日本における最初の英語教育専門雑誌『英語教授』(The English Teachers' Magazine, 1907) に『The Teaching of English to Japanese in Japan』を寄稿している。

また、イギリス文学に關しても、本稿に紹介した *English Literature for Japanese Students* を書いて日本における当時の英語・イギリス文学の關係者に刺激を与えたと思われる。東北大学にある「漱石文庫」にもヒューズのこの書（再版）を見出すことができるから、当時東京帝国大学でイギリス文学を講じていた夏目漱石もこの

書を読んでいたのかもしれない。なお、筆者が知る限り、現在この書を所蔵しているのは、金沢大学附属図書館、京都大学人間・環境学研究所総合人間学部図書館、京都府立図書館ぐらいである。

再版までされたこの書は、日本の英語教育史、イギリス文学教育史における貴重な一冊であることは言うまでもないが、成瀬の書き込みがある成瀬記念館所蔵の一冊は、イギリスにおける女子高等教育の確立を願って奮闘したヒューズと、日本女子大学校創立直後に彼女を受け入れ、日本の女子高等教育の確立を模索した成瀬との奇遇とも言える結びつきを実証する稀なる史料と言えるだろう。

さらに言えば、ヒューズに關してイギリスで出版された文献の記述を読むと、「ヒューズには著書はない」とか「ヒューズは教育書の序文やパンフレット以外にはほとんど書いていない」となっている。前述した *Teacher Training at Cambridge* も「ヒューズは、教育理論について本を書くのではなく、彼女の力あふれるエネルギーの多くを教えること、CTCを確立することに使った」と書き（二〇三頁）、巻末に並べたヒューズの著述リストにも二一七頁の本書は姿を見せない。それはおそらく、この書が日本人のために日本で出版されたためであろう。

が、日本でもこれまでほとんど知られることなく、彼女の祖国でも認識されていないとなると、この書は、ヒューズの唯一の珍書である。

ヒューズは帰国後も、日本女子大学の教育と発展に心を砕き、「英文学部生徒に送る」(『日本女子大学校学報』第一号、一九〇三年所収)、「日本に於ける愛国心の養成」(『家庭週報』第一号、一九〇四年所収)、「日露戦争と日本人の發達」(『家庭週報』第二三三号、一九〇五年所収)を書いて、学生や卒業生を励ました。それらの文章の中には、時折、our Japanese allies (われわれが同盟している日本人) という言葉が現れている。また成瀬に対して、自分が援助をするから英語力のある先生をイギリスに二年間留学させないか、という内容の書簡(一九〇五年八月一四日付)を送っている。

彼女は晩年、出身地ウエイルズの教育問題に力を注ぎ、ウエイルズ大学とカーデイフのユニヴァーシティ・コレッジの役員にもなり、一九二〇年にはウエイルズ大学から名誉法学博士の学位を受けた。さらに、赤十字の仕事にもかかわり、第一次世界大戦中には、病院で志願看護婦の指揮にあたっている。

一九二五年二月一九日、七四歳のヒューズは、ウエイルズの自宅で静かに息を引きとった。彼女の死を報じ

たロンドンのタイムズ紙(一九二五年二月二日、一八頁)は、彼女がCTCを退職したあと、日本の学校で英語を教えたことを伝えている。

なおCTCは、一九四九年に初代校長ヒューズに敬意を表してヒューズ・ホール(Hughes Hall)と名称を変え、新しい発展を見た。現在はケンブリッジ大学の正式なコレッジの一つであり、男女共学。また、ケンブリッジ大学に六つある大学院コレッジ中の最古のもので、多くの国から大学院生を集め、彼らの研究分野は女子教育のみならず多方面に拡がっているようだ。

〈注(1) 日本女子大学校英文学部第一回生の田口たかのは「ミス・ヒューズは英文科の先生というより、学校全体のことで成瀬先生の御相談相手だったようです」と述べている。『日本女子大学英文学科七十年史』(一九七六年)、一五頁。

(2) 白井「エリザベス・P・ヒューズ―成瀬仁蔵を助けた英国女子教育のパイオニア」『成瀬記念館』No.9(一九九三年)、白井「日本の女子大学創設前後に見る日英教育者の交流」『女子大学論』(女子教育研究双書10、ドメス出版、一九九五年)、白井「エリザベス・P・ヒューズ―成瀬仁蔵を助けた英国女子教育のパイオニア」『オクスフォードから』(日本経済評論社、一九九五年)、白井「日本女子大学校創設期における外国

人教師―英国女性ヒューズとフィリップス―』『日本女子大学文学部英文学科百周年記念誌』(二〇〇四年)、白井「日英交流と明治期の女子高等教育―放送大学講義で成瀬仁蔵を語る―」『成瀬記念館』No.21(二〇〇六年)、白井「成瀬に協力した英国の女性教育家たち」『日本女子高等教育の父成瀬仁蔵 あなたは天職を見つけたか』(二〇〇八年)。

(3) Pam Hirsch and Mark McBeth, *Teacher Training at Cambridge: The Initiatives of Oscar Browning and Elizabeth Hughes* (London: Mobern Press, 2004), pp. 119-20.

(4) Dorothea Beale (1831-1906) は注(7)に記す Frances M. Buss と並ぶイギリス女子教育の大御所。ロンドンの Queen's College で学び、卒業後そこで数学とラテン語を教えた。一八五八年からその死まで Cheltenham Ladies' College (以下CLCと記す)の校長として君臨し、この学校の名声を確固たるものに高め、一九世紀末に設立された寄宿制の女子パブリック・スクールに多大な影響を与える。ピールは最初は慎重であったがCLCの教育科目に数学、科学、ラテン語、ギリシヤ語を取り入れ、能力ある生徒にはオックスフォード、ケンブリッジ大学、あるいはロンドン大学に進学するよう励まし、彼女自身もオックスフォード大学内に女子コレッジの St. Hilda's College を創設している(一八九三年)。ピール時代のCLCには日本の女子教育家 下田歌子や津田梅子が見学に訪れた。一九〇二年、

ピールはエディンバラ大学から名誉法学博士の学位を受けた。

(5) 女性が学士の学位 (Bachelor of Arts) を得ることができるようになったのは、ケンブリッジ大学の場合は一八九八年。ちなみにロンドン大学では一八七八年、オックスフォード大学では一九二〇年。

(6) Hirsch and McBeth, p. 123.

(7) CLC 創立の提案者、推進者は、注(4)に記したピールと並ぶイギリス女子教育の大御所 Frances Mary Buss (1827-94)。彼女は、後に設立された女子ハイスクールに大きな影響を与えることとなった North London Collegiate School を創立し(一八五〇年)、その死まで校長を務めた。女子高等教育の推進に力を入れ、また女子中等教育の充実につながる良き教師の養成を重視して、CLCの創立後も、彼女の相続人 Sophie Bryant と共にCLCの発展を支え続けた。

(8) Hirsch and McBeth, p. 114.

(9) Oscar Browning (1837-1923) はイギリスの歴史家、教育者。ケンブリッジ大学の King's College に属して古典を学び、パブリック・スクールの Eton College 副校長、King's College のフェロウを経て、一八九一年には、初等教育の教師(男性)を養成する Cambridge University Day Training College の創立者の一人となり、その初代校長を務めた(一八九一―一九〇九年)。

(10) Hirsch and McBeth, p. 148.

- (11) たとえば一八九三年にシカゴで開催された万国博覧会における会議 (Congress) の中の女子教育部門に、ヒューズはイギリスの代表として出席した。Hirsch and McBeth, p. 198.
- (12) 青山なを『安井てつと東京女子大学』(慶應通信、一九八二年)には、ヒューズとCTCについて安井の言葉「校長ミス・イー・ビー・ヒューズは英国における女子教育のパイオニアで、且最も権威ある女子教育家であった。この学校は、一寸日本の女高師に似ていますが、程度はずっと高く、すでに大学を卒業した者が、教師になるのに必要な学科を修めたり、自分の専門学科の教授法を研究したりする所でした。……」が引用されており(四四―四五頁)、『さらにCTCの生活についても詳しい記述がある(三七―七七頁)。
- (13) 『Journal in London, "The Writings of Umeko Tsuda" (Tsuda College, 1984), p. 274 and p. 278.
- (14) ヒューズの日本における視察や講演については、大野延胤『E. P. Hughes in Japan (1901-1902)』『学習院大学文学部研究年報』三六輯(一九九〇年)を、またヒューズの講演の部分翻訳は『英国風俗』(知新館、一九〇二年)を参照。
- (15) 『Extracts From Letters, "The Cheltenham Ladies' College Magazine" (Autumn 1902), p. 285.
- (16) この書簡は、CTCの卒業生が発行する *Leaflets* に対する寄稿らしい。成瀬記念館は、この書簡の写し(手書き)を所蔵している。
- (17) 洪沢栄一「老躯を提げて故成瀬氏の遺志完成に」『成瀬先生追懐録』(桜楓会出版部、一九二八年)、三二二頁。
- (18) 筆者の調査によれば、『成瀬仁蔵著作集』第二巻、第三巻(日本女子大学発行)のなかに八回ヒューズの名前が見出せる。すなわち第二巻(一九七六年)の三〇六、三二五頁。第三巻(一九八一年)の三八三、三八四、三八七、四二五、六二二、六四五頁においてである。
- (19) 『成瀬仁蔵著作集』第三巻、三八三頁。
- (20) 『成瀬仁蔵著作集』第三巻、四一五頁。
- (21) 成瀬記念館が所蔵するこの書の表紙にはヒューズの手で、With E. P. Hughes' kind regards とある。
- (22) この書は奥付のみが日本語で記され、それによれば、発売所は丸善株式会社(東京市日本橋区)、印刷所は立教学院活版部(東京市日本橋区明石町)である。
- (23) 注(14)に記した大野氏のペーパーを参照。なお近年ヒューズが考える美術教育や体育教育、その日本への影響については研究が盛んになっており、研究成果が発表されている。
- (24) 成瀬の手により墨で書かれたこの文章は、成瀬記念館が所蔵。
- (25) 注(14)に記した大野氏のペーパーを参照。
- (26) この寄稿文は、『英語教授』(復刻版)(名著普及会、

一九八五年)の第一巻三号、四号所収。

(27)

夏目漱石の旧蔵書三〇六八冊からなる「漱石文庫」に入れられた本書(洋書 函架番号二八一)は、一九〇二(明治三五)年八月一七日発行の再版で(初版は同年七月七日)、七三―七六頁に印刷されたイギリス文学作家名リストの名前の冒頭に、ところどころ鉛筆で×印が書かれている。ライブラリアンによれば、それが誰によって何のために記されたかは不明とのこと。本の状態はかなり劣化が進んでいる。

(28)

オックスフォード大学出版局発行の *Dictionary of National Biography (Missing Persons)* (1993) の Hughes, Elizabeth Phillips の項を参照。この事典の内容を一新した最新版 *Oxford Dictionary of National Biography* (2004) においては、彼女が書いたパンフレットについての記述があるのみ。

(29)

Margaret Bottrill, *Hughes Hall (1885-1985)* (Cambridge: Rutherford Publications, 1985), p. 31. 後述するヒューズの死亡記事(タイムズ紙)にも「ヒューズは、たくさんの教育に関するパンフレットを出した」とあるのみ。

(慶應義塾福沢研究センター客員所員 しらい たかこ)



## 資料探訪

### 家政学研究所設置に向けて

### 上代タノがロックフェラー財団に要請した支援

蟻川 芳子

はじめに

ロックフェラー・アーカイブセンターを訪ねることに  
なったのは、総合研究所の研究課題として、「理学教育  
をリードした女性科学者たち」の研究が採択されたこと  
による。この女性科学者はすでに亡くなられた先輩科学  
者丹下ウメ・大橋廣・鈴木ひでる・奥田富子・道喜美  
代・高橋憲子・辻キヨ各先生についての研究であるが、  
その中で道先生が立ち上げた家政学研究科が、ロックフ  
ェラー財団から四万八千ドル（当時一ドル＝三六〇円）  
の支援を受けていることの裏付けが欲しいと思っただから  
である。本学には、支援された事実と金額は伝えられて  
いるが、具体的内容についてのまとまった書類などは、

どこかに埋もれているのかもしれないが見当たらない。  
嘗て丹下ウメ先生の学位論文を調べに、ジョンズ・ホプ  
キンス大学の図書館を訪ねたことがある。学位論文とと  
もに、予想以上の情報がぎっしりと詰まったファイルに  
感動した経験がよみがえり、二〇〇七年三月初旬、厳し  
い寒さが残るニューヨークを訪れた。この財団からの支  
援は、当時の第六代学長上代タノ先生の国際人としての  
情熱と手腕による賜物であり、上代タノ先生の面影を頭  
に浮かべながらの調査であった。

#### 上代タノ先生の思い出

一九五六（昭和三一）年四月、附属高等学校の入学式

に、新学長として登壇した上代タノ先生の姿に目を見張ったのは、私ばかりではない。お年は召していらつしやるが、ダークグリーンの細身のスーツの胸には、大輪のカトレアのコサージュ、背筋をピンと伸ばしてハイヒールという出で立ちは、アメリカ帰りのプロフェッサーという印象であった。優しいおばあちゃまというイメージの大橋廣前学長が懐かしく思ひ出されるとともに、何か時代が変わっていくような感じがした。戦後一〇年、日本は戦争の傷跡から立ち直り、石油化学産業、電気産業、自動車産業等が活発に動き出していた。茶の間にテレビ、若者たちはロカビリーに熱中し、日本に自由と明るさが広がってきた時代であった。私の大学生活を通して学長は上代先生であったが、大学一年生の時こんな思い出がある。当時「実践倫理」の授業で、夏休みに「成瀬論文」という課題があり、三つ程与えられたテーマの中から、私は「成瀬先生の教育観」について書いた。秋のある日、学長室に行くようにとのことで上代先生をお訪ねすると、『ものがたり 少年成瀬仁蔵』という本を手渡された。成瀬論文のご褒美だそうで、「呈 鈴木（旧姓）芳子様 上代たの」という署名入り、「成瀬仁蔵先生生誕百年記念出版」という印が押されている。著者は当時附属豊明小学校主事の西原慶一先生、元早稲田大学総長

西原春夫先生の御尊父である。成瀬先生生誕一〇〇年は一九五九年、私が大学一年生の時で出版間もない本であった。先生のお言葉は淡々としたものであったが、強いお励ましに聞こえた。

上代先生がメンバーの一人となって、「世界平和アピール七人委員会」が発足していたことは知っていたが、ノーベル賞受賞者湯川秀樹氏、東京大学総長茅誠司氏らと並んで、本学学長上代タノ先生と本学出身者平塚らいう氏のお名前が時折新聞紙上に載るのを、学生として誇りに思っていた。この委員会は、「人道主義と平和主義に立つ不偏不党の立場から、国際間の紛争は絶対に武力による解決をとるべきでないことを内外にアピールしてゆく」との申し合わせのもとに、有志の会として学長就任の前年一九五五年一月一日（第一次世界大戦の休戦記念日）に発足していた。

### 家政学研究科の設立

私が大学三年の一九六一年は、本学創立六〇周年にあたった。家政学部の上に、修士課程の大学院家政学研究科が設置された。児童学専攻と食物学専攻なので、私自身の専門とは関係ないのではあるが、私も大学院進学を考え始めた頃なのでなんとなく覚えていいる。『上代たの

文集』に収められた、一九六一年日本女子大学創立六〇周年記念式における「学長式辞」には、成瀬先生がつとに意図されていた大学院の設置が、ロックフェラー財団から研究補助金を与えられたことを機縁として、創立六〇周年記念事業後援会が組織され、この度大学院の開設となったという経緯が述べられている。

## ロックフェラー・アーカイブセンター



ロックフェラー・アーカイブセンターにて（筆者）

ニューヨークのグラントセントラルターミナルから列車でハドソン川を

北上すること約一時間、タリータウンで下車、タクシーでロックフェ

ラー・アーカイブセンターに向かった。厳重なフェ

ンスに囲まれた小高い丘の上にある石造りの建物。ベル

を押して迎え入れ

てもらい、説明を

受ける。予めメールで目的を伝えてあったので、すぐに分厚いファイルが二冊運び込まれた。一冊は「Japan Women's University Home Economics」、もう一冊は「Japan Women's University Library」である。そう言えば、図書館の建設にも財団の支援を受けていたのだ。今回の調査目的は、家政学研究科への支援である。何と上代タノ先生と財団の往復書簡は数十通、それに加えて購入備品および書籍のリストの往復であるから、驚くべき量である。コピーを要請するには限度があるので、まずは全体を把握しようとして読んでいるうちに、何と物語が展開されて、先へ先へと誘われて行った。持参したサンドイッチを昼食に食べ、三時頃には漸く必要部分のコピー三〇通程を依頼してセンターを後にした。

上代タノ先生は、一九五七年以前からロックフェラー財団に、家政学研究科設立のための資金援助を打診していた。幾度もの書簡のやり取り、財団関係者 Dr. Robert F. Chandler, Jr. の日本女子大学訪問、詳細な計画書の提出を経て、一九六〇年一月二二日、四万八千ドルの助成が財団の役員会で決定した。すべて財団を通して支払いが行われる、いわば現物支給の形で支援が行われた。当時、機器類は米国製のものが多く、また性能も良かったし、購入希望の図書は洋書であるからリーズナブルな支

援であったと思われる。支援が始まると本学からの発注、先方からの送り状、本学からの受領証と、煩雑にやり取りが為されているが、財団が発送した書簡はカーボン紙を挟んでタイプした写しが、本学からのものは「Tano Jodai」の署名入りの現物がファイルしてある。何にも勝る感激の書類であった。アーカイブセンターから入手した書簡の一部を抜粋してその概略を紹介しながら、支援の経緯を辿っていく。以後は敬称を略して記述する。

#### 上代タノとロックフェラー財団の往復書簡の抜粋

すでに一九五七年以前から上代タノは Dr. Charles B. Fats (CBF) と略、ロックフェラー財団人文科学部局長) と会うか、書簡のやりとりがあったと思われるが、ファイルの最初に出てきたのが、CBFの旅行日記からの抄録である。

一九五七年四月二五日 Charles B. Fats 極東旅行日記より

上代タノ氏が支援を要望しているのは、家政学における大学院の開設である。彼女の大学はこの分野では、最も充実した学部教育のプログラムを持っている。この分野は女性がリードできるし、またしなければならぬ分

野の一つで、日本の女性の地位と生活全般にわたって貢献することが期待される。この大学は私学にもかかわらず、文部省は大学院設立を歓迎している。しかしながら、大学院は家政学そのものと同時に生物科学や化学の分野であり、この新しい教育課程及び学部の教育課程においても、設備の改善が必要とされる。上代氏が希望するのはこの設備・図書及び教員の海外研修である。ひとたび設立すれば、それを運営していく自信はある。児童学においては、文部省の研究費が得られることと思う。これは一般のロックフェラープログラム外のものであるが、日本における女性の教育と、女性の地位向上への援助として、CBFはプログラム外の活動として考えることを薦める。

大学院は食物学専攻と児童学専攻を計画していたが、上代が支援を要請したのは、食物学専攻における設備、図書等である。食物学専攻の中心人物である道喜美代は、一九五八年からメリーランドの NIH (National Institute of Health・国立衛生研究所) で生化学の研究を行っていたが、一九五九年夏に帰国する際、上代は道にロックフェラー財団に立ち寄ってこの支援についての詳細を打ち合わせてくるように要請していたと、道の愛弟子で



I want to know how to apply  
for your Grant of Rockefeller Foundation.

I am going to leave here, National  
Institutes of Health, in the end of July,  
1959 and go back to Tokyo.

If you could tell me about the  
application of your Foundation, I will  
appreciate it. I hope you could help  
our laboratory.

Sincerely yours,

Dr. (Miss) Kimiyo Michi  
Professor of Japan Women's  
University, Bunkyo-ku, Tokyo

Present address:

National Cancer Institute,  
National Institutes of Health  
Bethesda 14, Maryland

本学名誉教授・理事の江澤郁子先生は語る。その証拠として、道が財団に送った書簡及びその返信の概略は、以下のとおり。

一九五九年六月二日 Dr. Robert F. Chandler, Jr. 宛  
道喜美代

メリーランド ベセスダのNIH国立衛生研究所の生化学研究室で、一九五八年から客員研究員として滞している。上代タノ先生がロックフェラー財団に、食物・栄養の研究施設への援助を受けたいと言っている。大学院を作るため、応募の方法を尋ねたい。七月下旬にNIHを出て、東京に戻る。(Dr. Robert F. Chandler, Jr. はロックフェラー財団農学部局長)

一九五九年六月二四日 Dr. 道喜美代宛 (CC.: 上代学長) Robert F. Chandler, Jr.

ロックフェラー財団としては、詳細な計画書(目的と経費)と、どのくらい質の高い教員が用意できるかが知りたい。Dr. J. G. Harar と私が、一九五八年に日本女子大学を訪ねた。その時、大学院を作って拡張したいなら、もう一度私達が訪ねて話し合いをしようと言ってきた。私は九月末から一〇月初旬に、日本に約二週間行くことに

している。大学を訪問して、話し合いたい。その前に詳細な計画を立てておくことを薦める。そうすれば話が固まるであろう。たぶん研究装置が適切と思われるが、そのためには場所と専門的なスタッフが必要。もし、あなたが七月下旬にニューヨークに立ち寄るならば喜んで話し合いたい。が、その他の用事がなければわざわざ来る必要はない。

しかし、Chandler はその後七月二二日発信の手紙で、九月下旬に直接フィリピンに行くことになってしまい、横浜には一日滞在するので、九月三日午前一〇時〜一二時にお会いできれば嬉しいと伝えてきた。

一九五九年八月二四日 Dr. Chandler 宛 上代タノ

七月二一日付でお手紙をいただいたのに、返事を出し損なってしまい申し訳ない。この二ヶ月くらい多忙な日々を送っていたが、言い訳にはならない。ご親切に感謝申し上げます。九月二三日一〇時から一二時、貴重なご指示を期待する。それまでにプランを練っておく。重ね重ね感謝申し上げます。

一九五九年八月二日 上代学長宛 Robert F.

Dear Dr. Chandler:

August 24, '59

R7C

6870  
Japan Women's  
Economic  
Association

I am really ashamed not to have written  
you at once and expressed my heart-felt  
appreciation for your kind letter dated July 21.

FEB - 1 1960

This summer has been extraordinarily full one  
for me and I have been to working all through  
these two months at my office, but this cannot  
be an excuse for failing to write a word of appreciation  
to you for all that you have kindly offered  
to do for us. Indeed I was deeply touched  
to read that you would come up to Tokyo from  
on September 23 and spare us two hours  
10:00 - 12:00 A.M. out of your precious  
day ~~at~~ here. I really don't know how to  
express our appreciation for such kindness. ~~of the~~  
~~offerings~~. We certainly will try our best to work  
our plan developing our home economics  
graduate study by that time, so that we may  
deserve your criticism and suggestions.

It will indeed be a great pleasure  
to see you and Mrs. Chandler again.

With much appreciation,  
yours sincerely,  
Tane Jodai

P.S. May we send ~~you~~ our car  
down to Yokohama to fetch you here?  
May we know the name  
of your boat?

Chandler, Jr.

お手紙を拝見した。九月二三日にお会いできることを嬉しく思っている。もし貴大学の車が横浜に迎えに来てくれるなら有難い。九時から九時半の間に待っていて欲しい。九月二日、アメリカンプレジデントライン社に、プレジデントクリブランド号が天候もしくは他の理由で遅れていないか、チェックしていただくようお願い。私は妻と、No.29の船室にいる。

貴大学には一〇時から一二時までしかいられない。ドライブに送ってもらい、帝国ホテルに一二時三〇分に着けば、午後には船に戻るだろう。

一九五九年九月二三日 大学院計画書

Dr. Chandler が来学するので計画書を用意した。宛先は Dr. Chandler、差出人は上代タノの名前が記されている。

本学は六〇年前、リベラルアーツカレッジとして成瀬仁蔵により創設された。家政学を学んだ卒業生を極めて多数輩出し、多くはこの分野のリーダーとなっている。

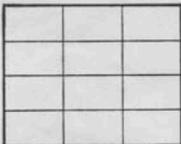
一九五三年には農家生活研究所を創設。社会、経済が急速な発展を遂げている現在、最新の機器を用いて高度な科学的視野に立ち、先進的な研究を行うためには、大

学院を作ることが急務である。

計画している大学院は、①食物・栄養を目的とする大学院 ②二年間の修士課程 ③カリキュラムは食物・栄養に関する基礎及び応用的研究 ④研究室は学部の研究室の一部を使い、定員は二〇名 ⑤教員とカリキュラムは別紙に記載。必要な機器類は別紙に記載。他の支出は日本女子大学で賄う。

とされ、五ページにわたって具体的な計画がリストアップされている。その内容は、一、カリキュラムと教員 二、備品 三、図書から成るもので、備品は動物実験室の設備・窒素測定装置・電気炉・ベックマン天秤・ベックマン pHメーター・分光光度計・ユニットキッチン・ロータリーエバポレーター・マイクロトームなど三〇種類、合計額三九、二九〇ドル、図書は『食物および食品の化学分析』・『食物および食品の化学と技術』・『生物化学概論』・『アミノ酸の生化学』などの単行本、食品研究の進歩 Vol. I~VII、タンパク質化学の進歩 Vol. I~XIII、など雑誌類の洋書、合計額七〇二、六五ドル、総計三九、九九二、六五ドルである。

一九六〇年一月二二日 四万八千ドルの支給を決定した通知（差出人の明記無し）



609 D  
Japan Women's Union  
Home Economics

FEB -1 1960

August 31, 1959

Dear President Jodai:

Thank you for your kind letter of August 24. I am glad to learn that it will be convenient for us to visit you and your staff for a few hours on September 23, 1959.

If it would not put you out too much, we would be very happy to have your car meet us at the dock in Yokohama. We would hope that your driver could be there between 9 and 9:30 in the morning on September 23. It might be well to check with the American President Lines in Yokohama on September 22 to be certain that the President Cleveland has not been delayed by weather or other considerations. Mrs. Chandler and I shall be occupying Cabin No. 29 on this ship.

As indicated to you earlier, we shall like to spend approximately two hours with you and your staff during the forenoon. If your car could deliver us after our meeting to the Imperial Hotel so as to arrive there by 12:30 p.m., we shall be able to return to the ship in the afternoon without further assistance.

With kind personal regards,

Sincerely yours,

Robert F. Chandler, Jr.  
Associate Director

Dr. Tano Jodai, President  
Japan Women's University  
Bunkyo-ku  
Tokyo, Japan

ar

日本女子大学の家政学における大学院開設のために四万八千ドルを支給する。この助成金は一九六〇年二月一日から三年間有効とする。

次の点が評価された。

○ 農芸科学：食物・栄養（アジア・ラテンアメリカ・中東・アフリカへと拡大したプログラム）

○ 家政学では前例がない

○ 総評：日本の大きな問題の一つは、バランスの取れた食事に関する教育の必要性である。現在国民は、タンパク質、ミネラル、ビタミン不足であり、日本人の食生活を改善するために、家政学において科学研究者や教育者を養成する必要がある。数ある日本の家政学教育機関で、日本女子大学が食物・栄養における最高の教育を提供できるものと判断した。

日本女子大学は一九〇一年に創設、一九四七年新制大学となった。学生数二二五〇名、専任教員一五〇名、非常勤講師一〇〇名。上代タノ学長は、二年間にわたってこの計画をロックフェラー財団に申請し、財団職員も大学に向いて話し合いをした成果が、このような形で実を結んだ。

助成金：四八、〇〇〇ドルのうち、二九、二九〇ドルは

実験装置、七〇二、六五ドルは図書にあてる。梱包、運送料として二〇%を追加し、四八、〇〇〇ドルとした。支払いは、上代タノ学長からの要請により行う。殆どの品は米国において購入するが、助成金の一部は日本で使うことも可能である。

コメント：日本女子大学は、リベラルアーツ、社会学を含む幅広いカリキュラムを持つが、半数近くの学生が家政学を学んでいる。卒業生は地方で職を得る者も多いためである。日本女子大学は農家や家庭生活に明らかに影響を与えるものと思われる。

将来展望：財団の農学部局関係者は、日本女子大学への訪問を継続する。将来更なる支援が可能となろう。

この後、財団の秘書補佐から、改めて以下の決定通知が届いた。

一九六〇年二月一日 上代学長宛 秘書補佐 Janet M. Paine (CC: R. F. Chandler, Jr.)

ロックフェラー財団の役員会は一九六〇年一月二二日、日本女子大学に四八、〇〇〇ドルを助成することを決定。

609D  
Japan Women's University  
How economics

TAKATA-TOYOKAWA-CHO, BUNKYO-KU, TOKYO, JAPAN  
TELEPHONE: OTSUKA(94)3131

April 14, 1961

Miss Janet M. Paine  
Assistant Secretary  
The Rockefeller Foundation  
111 West 50th Street  
New York 20, N.Y.  
U.S.A.

APR 14 1961		
JSH		
AAA	APR 20 1961	
CAF		
AMM	APR 27 1961	
	MAY 11 1961	MAY 16 1961

Dear Miss Paine:

It is a great honor and pleasure for us to inform you that at a meeting of the Ministry of Education a decision was made on March 31 to sanction the establishment of a graduate school in Food and Nutrition and Child Study at the Japan Women's University. In accordance with the advice of the Education Ministry, we inaugurated the school on April 1.

Thanks to the generous help of the Rockefeller Foundation, the laboratories and library have been fully equipped for advanced studies. The construction work of the new Science Building, which will house offices, classrooms, and laboratories of the graduate school, has been pushed day and night and is to be completed on April 20.

A brief public announcement of the sanctioned establishment of our graduate school will be made in the Official Gazette soon, but we received inquiries about admission to the graduate school already.

The Board of Trustees and the faculty feel that they shall be unable to open the graduate school without voicing warmest appreciation of the help and cooperation from the Foundation.

It is our greatest pleasure to report this action to you. We shall be pleased, if you will convey this good news and our deepest gratitude to the Executive Committee of the Rockefeller Foundation.

Sincerely yours,

Tano Jodai  
President

Janet M. Paine 宛 上代タノ書簡 1961.4.14

Image by courtesy of Rockefeller Archive Center

本助成は一九六〇年二月一日から三年間有効である。この助成金は実験装置と科学書籍の購入にあつてゐる。もし希望があれば、当方で発注し、業者に直接支払つてもよい。

これに対し、二月九日に Janet, M. Paine 宛、二月二二日に Charles B. Fahn 宛に上代タノが支援決定に対する礼状を発送している。

一九六一年四月一四日 秘書補佐 Janet M. Paine 宛  
上代タノ

三月二二日、文部省より日本女子大学に、食物・栄養学専攻と児童学専攻の大学院設置が認可された。四月一日より開学する。この吉報と私共の深謝の念を、財団役員に伝えていただければ幸いである。

この後の機器および図書の発注リスト等は省略。

一九六一年四月二二日 Janet M. Paine 宛 上代タノ

発注した図書が届いた。ベックマン pH メーターにガラス電極二本、カロメル電極三本を注文。新しいサイエンスの建物が、昨日（四月二〇日）創立記念日ということであろう）開館した。この開館に先立って、人文科学部

局長 Dr. Ellis にお目にかかり、財団からの支援に感謝することができたのは幸いである。

一九六三年七月二一日 ロックフェラー財団役員宛  
上代タノ

貴財団の支援により、一九六一年に食物・栄養学専攻の大学院が発足したが、このたび最初の卒業生を送り出した。指導教員と院生は次のとおりである。

○肝酵素に及ぼす非必須アミノ酸の栄養効果と低タンパク食で飼育されたラットの成長

Dr. 道喜美代、江澤郁子

○粗食者に関する研究 Dr. 武藤静子、宮原千穂子

○魚筋肉たんぱく質の denaturation Dr. 右田正男、水野文子

○柿のペクチン—メチルエステラーゼについて Dr. 岩崎康男、木村葉子

○食材料の熱伝導度と粘弾力性 中濱信子

現在食物・栄養学専攻には一〇名の学生が学んでいる。二〇名が理想であるが、能力のある学生を選んでいる。貴財団からの援助で実験装置にも恵まれ、学生は興味を持って幅広く興の深い研究を行っている。成果が期待される。改めて貴財団に感謝する。

一九六三年七月一日 John H. Greenfield 宛 上代  
タノ

最後の機器が届いた。これで助成金による全ての物品の購入は終了した。心から感謝申し上げる。助成金で購入した物品のリストを同封する。貴財団のリストと一致すれば幸いである。

一九六三年七月二三日 上代タノ学長宛 (CC: R. F. Chandler, Jr. (レニラ便) 部長補佐 Robert D. Osler

上代学長からのロックフェラー財団宛の礼状を受け取った。優れた食物・栄養学専攻の大学院を作られたことを、喜ばしく思う。

一九六三年八月六日 上代タノ学長宛 John H. Greenfield

貴大学からの物品購入リストと、当方の記録が一致したので、帳簿の口座を閉じる。

この後も上代学長は、食物・栄養学専攻の図書の実践に関して再度ロックフェラー財団に支援を要請した。大  
学には一九六四年に新しい図書館も完成している。一九

六五年三月、食物・栄養および生物学・農学分野の図書と学術雑誌の購入費として一万五千ドルまでの支援が決定した。これが大学院に関する最後の支援である。そして、この三月三二日を以て上代タノは学長を辞任した。一九六五年四月六日には、新しく学長に就任した有賀喜左衛門の名で、この支援に対する礼状と、図書のリスト(合計一四、九六五、〇〇ドル)が発送されている。

上代タノ学長の国際性、積極性、理事長としての手腕に、心から敬服するのみである。

## 調査報告

### 旧制時代における本学への留学生

附 日本女子大学校留学生名簿

大門 泰子

はじめに

二〇一一年、本学は創立一一〇周年を迎えた。それを記念して、成瀬記念館では本学の国際交流の歴史を紹介する展示と記念写真集の編纂をおこない、一九〇〇年代初頭から積み重ねられてきた多くの国々、人々とのつながりの厚みを再確認した。

創立以前の一八九〇年に成瀬仁蔵が渡米したことに始まり、歴代校長・学長や数多くの教員がアメリカやヨーロッパの大学等に学び、見聞を広げた。帰国後は、教育や研究にはもちろん、社会事業や国際的な平和運動など、幅広く社会でその経験を活かしてきた。そして、そこで結ばれた信頼関係が、様々な形で本学への支援と

なっており、あらわれた。

数々の外国の著名人の来校や多額の援助、戦後のいち早い新制大学への昇格などは、全てそこに源があった。また、創立初期から丹下ウメや原口鶴子<sup>①</sup>のように、より専門的な研究を続ける意志をもつ学生を海外へ送り出し、励まし、帰国後の活躍を期待した。

一方、東京女子高等師範学校や女子美術学校、東京女子医学専門学校などと並び、本学でも創立間もない時期より、中国や朝鮮、台湾などアジアの国々からの留学生が学んでいた。その数は、戦前だけで四〇〇人に近い。留学生用の特別な課程はなかったが、日本人とともに、高いレベルの学問を究めた留学生は、帰国後、教員や社

表1 国別・年別入学者及びそのうちの卒業者実数  
単位：人

	中国		朝鮮		台湾		満州		その他		合計	
	入学	卒業	入学	卒業	入学	卒業	入学	卒業	入学	卒業	入学	卒業
1906	1										1	1
1907	2	1									2	2
1908	3	2									3	
1909	2										2	
1910	1	1									1	1
1911												
1912												
1913	1	1									1	1
1914	3	2									3	2
1915	5	2									5	2
1916												
1917	1	1									1	1
1918												
1919												
1920	1	1	2	1							3	2
1921	4	3	4	1							8	4
1922	1	1	5	2							6	3
1923	3	1	1	1							4	2
1924	4	2	2	2							6	4
1925	3	2	7	4	1	1					11	7
1926			5	2	2	2					7	4
1927			10	3	4	1					14	4
1928			5	1	1	1					6	2
1929	2	2	4	2	3	2			1	1	10	7
1930	3	1	8	6	4	1					15	8
1931	1		3	3	5	3	1	1			10	7
1932			3	2	1						4	2
1933			7	3	1	1	3	3			11	7
1934	2	1	12	2	4	1	15	8			33	12
1935	2		11	3	5	2	2	2			20	7
1936	1		15	6	7	4	6	5	1	1	30	16
1937	1		12	2	3	2	5	3			21	7
1938			14	9	6	5	5	4			25	18
1939	1	1	9	3	1	1					11	5
1940	4	1	15	10	3	2	2	2			24	15
1941	10	6	8	5	3	1	3	2			24	14
1942	3	2	3	1	3	1	1	1			10	4
1943	6	1					2				8	1
1944	2								3		5	
1945												
1946			1								1	
1947	1		1								2	
	74	35	167	74	57	31	45	30	5	2	348	172

会活動家など人々を導く立場で活動し、祖国の発展の歴史に刻まれている人物が少なくない。

これまで、成瀬記念館では留學生の状況を断片的には把握していたものの、個人情報保護の観点から、留學生の氏名や出身国などその全貌を明らかにする作業はおこなってこなかった。しかし、一九八〇年代以降に女性史や女子教育の研究が盛んになると、戦前の中国や朝鮮から日本の女子高等教育機関へ留学した人々の足跡がした

いに明らかとなり、そのなかでは本学を卒業した留學生も数多く取り上げられるようになった。<sup>3)</sup>留學生に関わる正確な歴史的事実を伝えることは、そうした研究に寄与することはもちろん、アジアにおける女子高等教育、家政学研究を牽引してきた本学の責任でもある。

本稿では、日本女子大学校時代（一九〇一～四七年）における留學生の全体像を、調査結果をもとに報告する。個人情報へ配慮をしながら、留學生一覧を本稿末尾に掲

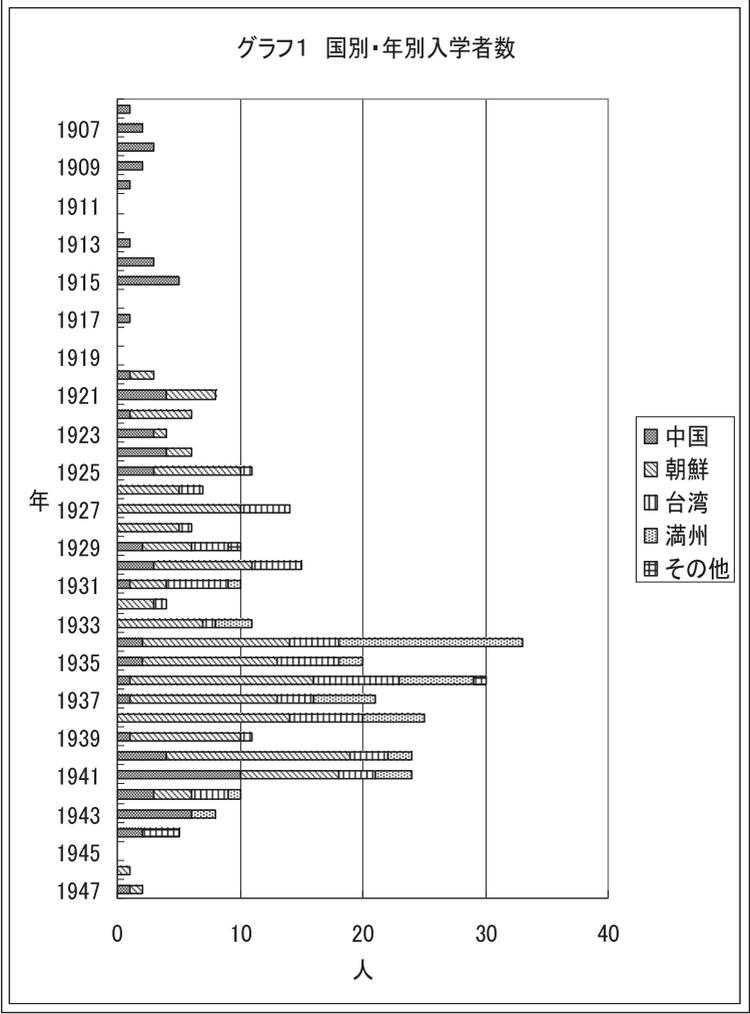
載する。なお、本文中の資料はこの名簿を基準として作成したものである。

### 1 入学と卒業

旧制時代（一九〇一～一九四七年）、本学に入学した留学生は予科（普通予科・英文学部予備科）一二名、本科三三三三名、高等学部・大学本科一五名であった。初の留学生は中国広東省出身の何香凝である。何は一九〇六年、新設されたばかりの教育学部に入学した。自然科学など理科教育を中心とした学部である。何は病気のた

めに一九〇九年に退学

グラフ1 国別・年別入学者数



し、その後女子美術学校に学んだが、帰国後、革命活動  
を続け中華人民共和国建国に参加した人物として名高い。<sup>④</sup>

一九一〇年代までは中国からの留学生だけであったが、  
一九二〇年になると朝鮮、一九二五年には台湾、そして  
一九三四年以降は満州から留学生が入学してきた。表1  
とグラフ1は年別の留学生数の推移を示したものであり、  
三つのヤマ場がある。一つは一九二七年で、朝鮮からの  
留学生が一〇人と多かった。二つ目は戦前を通じて最も  
入学者の多かった一九三四年、朝鮮から二人、満州か  
らは一五人の入学者がいる。三つ目は一九四一年であり、  
この年だけ突然中国からの留学生が一〇人にふえている。  
中国からの留学生は、一九二〇年代後半からはほとんど  
入学していなかった。日中戦争から太平洋戦争が始まる  
までの時期にとっても多くの留学生が入学していたことが  
グラフからわかる。各国の留学生数は、朝鮮が一六七人  
ともっとも多く、次いで中国の七四人、台湾五七人、満  
州四五人と続く。タイやモンゴル、ベトナムから来日し  
た学生もいた。

初の卒業生は、一九〇七年、中国出身で教育学部に入  
学した陳徳香で、修学年数三年で、一九一〇年に卒業し  
た。陳は入学後間もなく「中国留日女学生会」の幹事と  
なって、留学生の相互扶助組織の中心としても活動して

いる。<sup>⑥</sup> 予科を除いた入学者三四八人のなかで卒業できた  
のは、およそ半数の一七二人、卒業が決して容易ではな  
いことがわかる。入学年からみた卒業率は一九三八年に  
入学した学生がもっとも高く、二五人中一人が卒業  
した。卒業率が高い国は満州で、四五人中三〇人が卒業  
している。

退学者は一年前後で退学している者が多い。退学の理  
由は、各国とも差はなく、家事都合と病気が多く、なか  
には無届欠席のまま退学になってしまったなど、事情は  
さまざまである。日中戦争勃発後、中国に帰国したまま  
もどらず、文部省に問い合わせてもわからなかったとい  
うケースが特別例としてあった。卒業年に注目してみ  
ると、一九四一年の卒業生がもっとも多く、二一人であっ  
た。ただし、この年は、三月に加えて、太平洋戦争が始  
まった一二月にも繰り上げ卒業生を出したため、必然的  
にその数は多くなった。

## 2 年齢と出身校

各学部への入学資格は、専門学校令による認可を受け  
た一九〇四年から一九一六年までは「年齢十七歳以上」  
で「本校予科卒業生」「本校附属高等女学校卒業生」「修  
業年限五ヶ年官公私立高等女学校の卒業生」「師範学校

表2 入学者 年齢別分類 単位：人

	17歳以下	18～20歳	21～23歳	24歳以上	不明	計
1906				1		1
1907			1	1		2
1908	2			1		3
1909			2			2
1910		1				1
1911						
1912						
1913		1				1
1914	1	1	1			3
1915		2	1	1	1	5
1916						
1917		1				1
1918						
1919						
1920		2	1			3
1921		4	2	2		8
1922		3	3			6
1923		2	1	1		4
1924	2	3		1		6
1925	3	5	3			11
1926	3	2	2			7
1927	2	8	4			14
1928	3	2			1	6
1929	4	2	3		1	10
1930	3	5	5	2		15
1931	4	5	1			10
1932	3	1				4
1933	7	3	1			11
1934	14	14	4	1		33
1935	10	9	1			20
1936	17	13				30
1937	9	10	1		1	21
1938	21	4				25
1939	7	4				11
1940	16	6	1	1		24
1941	14	9	1			24
1942	6	3	1			10
1943	3	5				8
1944	2	1	2			5
1945						1
1946	1					2
1947	1	1				
	158	132	42	12	4	348

卒業生」 「修業年限四ヶ年の高等女学校卒業後一ヶ年以上専攻科又は補習科を修めたるもの」とされていた。修業年数は三年であった。一九一七年に新学制になってからは四年制の女学校の卒業生でも入学できるようになり、最低年齢の規定も記されなくなった。修業年数は四年が基本となった。

表2は、各年四月の入学時点での年齢を四つの年齢層に分けて統計にしたものである（予科は除く）。年齢層の特徴をみると、一九二〇年代前半までは比較的年長者

が多く、師範学校を卒業して学校に勤めてから留学してきた学生もいた。こうした年齢の傾向は、日本人の入学生についても同様で、初期のころは特に年齢に幅があった。なかには既婚者で子どもをあずけて入学した日本人の学生もいたほどで、留学生が特別ではなかった。三〇年代になると女学校を卒業して直ぐに入学してくる若年層が半数以上となり、一五歳で入学した留学生もいた。

出身校はほとんどが出身地の中等教育機関か師範学校であった。中国からの留学生は概して師範学校の出身者

が多く、多様な地域から来ている。初期の留学生に、下田歌子の設立した実践女学校出身者が多いのは、同様に留学生部が設置されていたからで、留学生部では一九〇一年から一年にかけて二〇〇余人の中国人女子留学生<sup>10)</sup>が学んでいた。朝鮮では、淑明女子高等普通学校、同愛女子高等普通学校、平壤公立女子高等普通学校、李花女子高等普通学校などの出身者が目立って多く、毎年のように複数の留学生を送り出されている。朝鮮では、経済的にゆとりのある家庭の子女にとって留学は特別なことではなく、学校のなかで一人が留学への意志を表せば、それに追従する生徒が必ず出てくるという風潮があった<sup>11)</sup>。留学先を選択する上で同窓生のつながりが大きかったといえるだろう。台湾からは台湾全域の公立高等女学校から留学してきていて、満州からは、奉天省立女子師範学校の出身者が目立つなど、各国でそれぞれ特徴がある。日本国内の女学校の出身者も四〇人ほどいたが、東京の女学校だけではなく、京都や岡山、広島など地方の女学校の卒業生もいた。

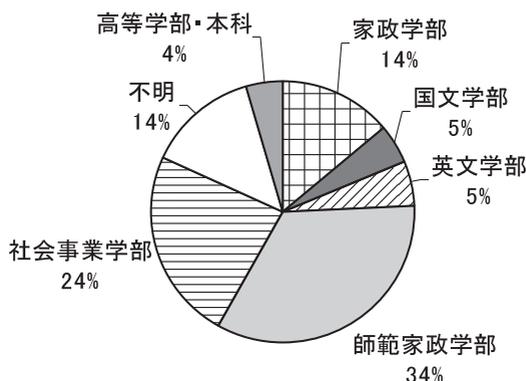
### 3 入学学部

本学の学部構成は、創立当初は本科として家政と国文と英文の三学部が開設されていて、一九〇六年に教育学

部が新設された。教育学部は理科教育に主力がおかれ、女子の理数科教員の養成を目指した。しかし、女子に対する自然科学教育の関心はまだ低く、教員の需要もなかったため方向転換を余儀なくされ、一九一七年に家事科中等教員の養成を主目的とする師範家政学部へと改組された。師範家政学部となつてからは、もともと学生数が多い学部として定着していく。一九二一年には、アジアで初めての学部として社会事業学部が開設された。女子が社会改良のために働くことを期待して創設された学部で、女工保全科と児童保全科の二学科に分かれていた。一九二七年からは、大学昇格への地ならしとして高等学部（修業年限三年）<sup>12)</sup>が、一九三〇年からは高等学部の上に大学本科（修業年限三年）<sup>13)</sup>が、従来の五学部と並行する形で設置されたが、いずれも時期尚早として一九三六年までで姿を消した。その後、国文学部と英文学部はそのまま、家政学部は家政学部第一類、師範家政学部は家政学部第二類、社会事業学部は家政学部第三類と名称を変えたが、修業年限も目指す教育にも変わりはなかった。ただし、社会事業学部のみ、実践を重んじる学問としての性質ゆえに、一九三三年から修業年限が三年に短縮された。

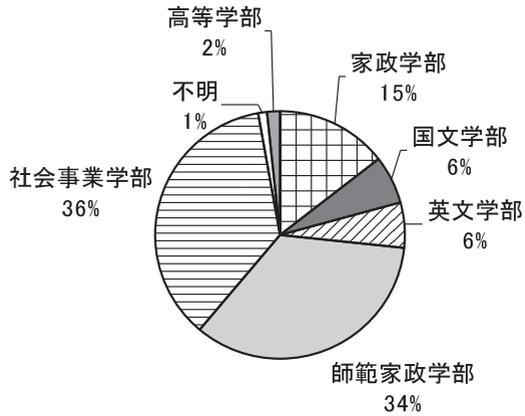
留学生は、これらの学部<sup>14)</sup>に毎年途切れることなく入学

グラフ2 学部別入学者の割合(総数348名)

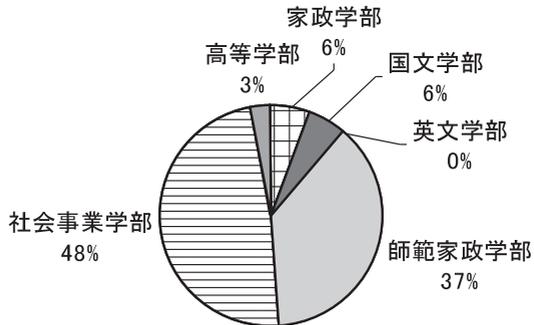


していたが、学部別に入学者の割合をみるとグラフ2のようになる。英文学部と国文学部への入学者はどちらも五%と少なく、師範家政学部(含教育学部)への入学者が三四%ともっとも多い。次いで社会事業学部の二五%となるが、同学部の開設年が遅いことを考えると、その人気の度合いは師範家政学部と同様であったといえる。師範家政学部に入学者のもの、社会事業学部が開設されるとすぐに転部した学生もいた。どちらの学部も、家庭や社会において人々の生活の改良に寄与する人材を養成する教育の場であったが、国によって、社会への貢献の仕方の違いが学部の選択にはつきりとあらわれている。次頁のグラフ3は卒業生の出身学部を国ごとに分けてみたものである。卒業生全体でみた場合、師範家政学部と社会事業学部と他の学部がほぼ同じ割合となっている。中国は一九二〇年代初めまでは教育学部・師範家政学部への入学が大半であったが、二二一年に社会事業学部が設置されてからは、ほとんどが同学部へ入学している。辛亥革命前後のこの時期、中国人女子留学生は「改革・革命救国」という目的を持って、日本で具体的な初・中等留学教育よりも現実社会を学習する方を重視<sup>14)</sup>し、「日本を通じて、西洋の新女性観、新社会制度を学ぼう」と「積極的に様々な実践活動を行なった」<sup>15)</sup>。そう

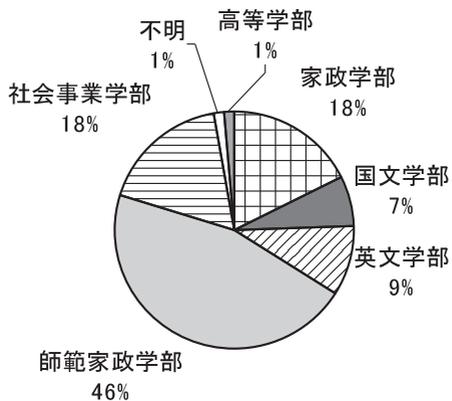
グラフ3-1 全体 卒業学部別割合(実数172人)



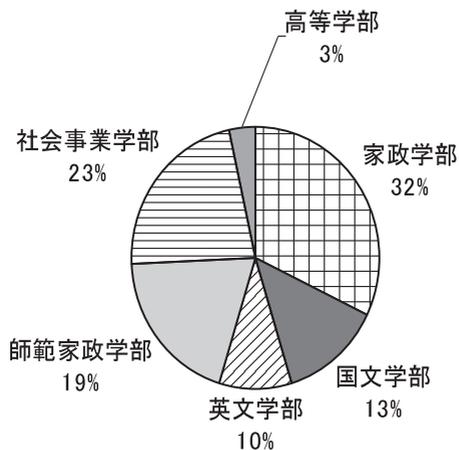
グラフ3-2 中国 卒業学部割合(実数35人)



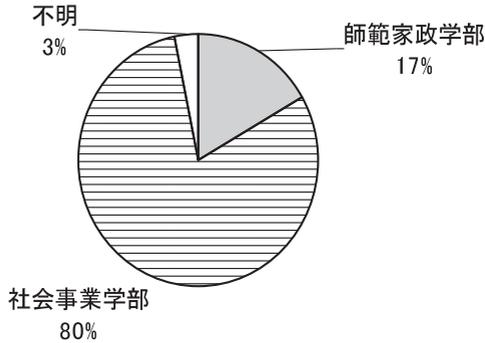
グラフ3-3 朝鮮 卒業学部割合(実数74人)



グラフ3-4 台湾 卒業学部別割合(実数31人)



グラフ3-5 満州 卒業学部割合(実数30人)



した学生にとつては、社会事業学部が希望にかなう学部であったらう。

満州も社会事業学部への入学者が圧倒的であったが、同学部の目指す目的の明確さが半植民地・傀儡政権下にある貧困な社会や劣悪な労働と直ちに結びつき、進学希望者の学部決定の理由につながったことは容易に想像できる。また、社会事業学部の修業年限が他の学部よりも一年短い三年制であったということも少なからず影響しているに違いない。

朝鮮の場合は、師範家政学部への入学者が半数を占める。当時の朝鮮では社会進出したい女性のもっとも希望する職業が教員<sup>16</sup>で、教員となつて「遅れている祖国の子どもを導きたい」という素朴な教育者意識<sup>17</sup>があつた。同国での家事科教育の重みや、家庭生活の改良への関心は師範家政学部の選択につながっている。台湾の場合には、他国とは異なり家政学部の卒業生の割合が大きいことが特徴であると同時に、全ての学部バランスよく入学者がいることが興味深い。台湾は、一八九五年以来、長く総督府の直接統治下におかれ、徹底的な皇民化政策を進められた国であつたが、当然教育にも反映し、日本の学校と近い状況にあつた。それが留学を希望した女性たちに、幅広い学部選択をさせた要因かもしれない。

## おわりに

今回の調査によって、旧制時代の本学で実にたくさん  
の留学生が学んでいたことを実証することができた。そ  
の出身地は東アジア全体に広がり、まだ国交のない国に  
も多くの卒業生がいることがわかる。基本的なデータの  
分析を加えることで、出身国による相異が明らかとなっ  
たが、ここで得られた事実をさらに政治や社会などの歴  
史的な背景、文部省の留学生政策などとも重ねて考察す  
る必要がある。大日本帝国の膨張とともに、帝国内の  
人々の交流が活発になっていったが、大陸へ渡った多く  
の日本人からの影響、関係があったことも十分に考えら  
れる。

グローバル化の時代を迎えた今日、高等教育における  
国際的流動性はますます高まっている。留学生たちの帰  
国後の人生をたどり、本学の歴史に刻む作業は、新たな  
人脈や学問の広がりを構築することになる。それが、民  
間レベルでの豊かな文化交流と国際平和への貢献につな  
がっていくことはまちがいない。創立一一〇年の伝統が  
果たす役割は、まさにここにあるといえるだろう。

## 《注》

(1) 一九〇四年卒業、家政学部一回生。卒業後、化学教室

の助手として残りながら研究を続け、中等化学教員検  
定試験に合格、さらに初の女子帝大生として東北帝国  
大学及び大学院に進学。一九二一年から、スタンフ  
ォード、次いでコロンビア大学に学び、ジョンズ・ホ  
プキンス大学で「ステロール類の化合物について」の  
論文をまとめ Ph.D. を取得。帰国後は本学の教授とな  
り、理化学研究所でも研究を続け農学博士号を取得し  
た。

(2) 一九〇六年卒業、英文学部三回生。一九〇七年よりコ  
ロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ大学院に入學  
し、ソーンダイク教授の指導のもと教育心理学の研究  
をおこなった。高い評価を得た博士論文に加筆して、  
一九一四年『心的作業及び疲労の研究』を出版した。  
日本人女性として初めて Ph.D. を取得した。

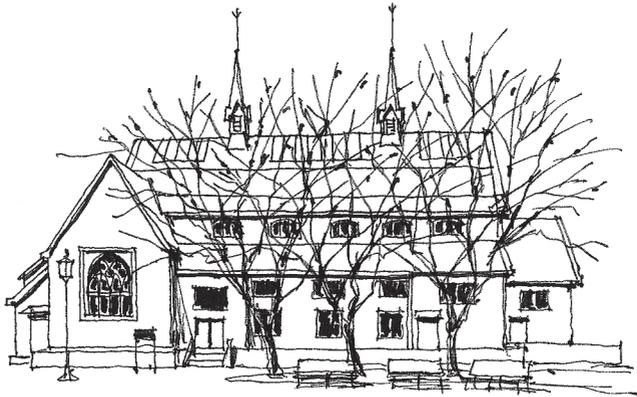
(3) 周一川著『中国人女性の日本留学史研究』(二〇〇〇  
年・国書刊行会)、朴宣美著『朝鮮女性の知の回遊  
植民地文化支配と日本留学』(二〇〇五年・山川出版  
社)に詳しい研究史が掲載されている。

(4) 久保田文次「日本女子大学と中国」(『成瀬記念館』No  
14 一九九八年)参照。

(5) 一九四一年三月、タイ出身初の留学生が卒業するにあ  
たり、インタビュー記事が『家庭週報』一五〇三号  
(一九四一年三月二一日)に掲載された。帰国後は、  
「官立の家政女学校の教壇に立つ」予定と同紙に記さ  
れている。

- (6) 前掲『中国人女性の日本留学史研究』77頁。
- (7) 戦時下の措置として、本来一九四二年三月に卒業する予定の学生が、四一年一二月に卒業した。四二年から四四年までの三年間は九月に卒業となった。
- (8) 日本女子大学史資料集第5―(二)―(四)、『日本女子大学校規則 明治三五―大正八年』(一九九九―二〇一二年発行) 参照。
- (9) 本学第四代校長井上秀は一八九九年に長女を出産した後、本学第一回生として家政学部に入學した。
- (10) 前掲『中国人女性の日本留学史研究』56―88頁参照。
- (11) 前掲『朝鮮女性の知の回遊 植民地文化支配と日本留学』56―61頁参照。
- (12) 高等学部文科に入學した留學生は九人、理科に五人、大学本科は一人であった。高等学部に入學後、本科の学部へ転部して卒業した學生が二人いる。
- (13) 戦時体制が強まるなかで、社会事業学部の社会という名称が「社会主義」と混同されるため名称を変更した。
- (14) 前掲『中国人女性の日本留学史研究』229頁。
- (15) 同前。
- (16) 前掲『朝鮮女性の知の回遊 植民地文化支配と日本留学』53頁。
- (17) 同前、68頁。

(成瀬記念館非常勤館員 おおかど やすこ)



# 日本女子大学校留学生名簿

## <凡例>

- ・本名簿は学籍簿をもとに、留学生と明らかに判断できるデータをもとに、入学年、入学学部を基準として作成した。(社)日本女子大学教育文化振興桜楓会の作成した同窓会名簿を参考にした。
- ・出身国別に作成し、高等学部と大学本科の入学生も含んでいる。予科の入学生は最後にまとめて掲載した。
- ・卒業した学生については太字で表した。入学した学部と異なる場合のみ、卒業年と併せて記載した。
- ・入学学部名については学籍簿の分類通りとした。
- ・入学学部は途中退学者については、確定できないものがある。
- ・創氏改名したと思われる日本名については■■■■で表した。
- ・年齢は、各人の生年月日と入学年から算出した。4月を基準としている。
- ・出身地は学籍簿に記載された通りの記載をした。
- ・原資料中、判読不明な文字については字数分の□で表した。
- ・2011年秋に創立110周年記念として刊行した *JWU 1901-2011 A History in Photographs* に *Foreign Graduates under Pre-war Educational System* として国別、学部別留学生数の統計を掲載したが、今回の詳細な調査により若干の変更がでた。

## 中国

入学年	入学生学部	卒業・退学年	氏名	年齢	出身地	出身校
1906	教育学部	1909	何香凝	27	清国広東広州	大成学校
1907	教育学部	1910	陳徳香	25	清国浙江山陰県	上海愛国女学校普通科修業/東京□□美術学校修業中
1907	教育学部	1912	林孟昭	21	清国浙江?	上海愛国女学校にて普通科修業/日本にて日語、英語、数学、音楽を修める
1908	教育学部	1910	林復		清国福建省	上海愛国女学校尋常科修了/東京大成中学校にて日語と普通学とを修了/私立女子英学塾予科二年修了
1908	教育学部	1911	康同荷	16	新国広東省	実践女学校卒業/本校普通予科修了
1908	教育学部	1913	林敢平(楊敢平)	17	清国広東省	実践女学校卒業/本校普通予科修了
1909	教育学部	1911	馬君幹	23	清国安徽省	青山女学院にて日語修業/本校普通予科修了
1909	教育学部	1912	陳夢飛	21	清国広東	実践女学校卒業/本校普通予科修了
1910	教育学部家政科一部	1914	黄国翼	20	清国湖南長沙県	実践女学校留学生部中学卒業/本校普通予科修了
1913	教育学部家政科一部	1916	盧桂郷	19	中華民国山西省	長崎県立長崎高等女学校卒業/長崎県立長崎高等女学校補習科修了
1914	教育学部家政科一部	1918	程李福	17	支那江西	実践女学校卒業
1914	教育学部家政科一部	1915	胡磊	21	支那江西	江西省義務女学部師範科卒業
1914	教育学部家政科一部	1918	張來備	18	支那江西省	北京女子師範第二年級修了
1915	教育学部家政科一部	1917	張清子	22	支那雲南省	雲南師範学校卒業
1915	教育学部家政科一部	1920	薩本祥	19	福建省	福建女子師範学校卒業/帝国女子専門学校修業
1915	教育学部家政科一部	1919	朱球英(程季福)	20	福州城内	福建女子師範学校卒業
1915	教育学部家政科一部	1918	劉若齋	25	江西省	記載なし
1915	英文学部		黄誉珍		支那江西省	府立女子師範学校三年一学期修業/中央女子美学会において美術専修
1917	師範家政学部	1921	李雪英	20	中華民国広東省	広東省官立女子師範学校本科卒業
1920	師範家政学部	1924	張佩擅	19	支那広東省	記載なし
1921	師範家政学部	1926	彭敦禮	24	中華民国江西省	□□立女子師範卒業/神田□□高等予備学校に於いて日本語を修業
1921	師範家政学部	1936	梁筠端	18	中華民国広東省	□□公立女子師範第三学年修業/日華日本語予備学校に修業す
1921	師範家政学部	1925 社会事業学部	黄庸儀(黄省儀)	21	中華民国広東省	江□省興錦□□女師範卒業/日本体育会体操学校女子部にて高等科卒業、女子音楽学校学校本科二年修、江□省代用女子中学校及□□学校に奉職
1921	師範家政学部	1927 社会事業学部	潘寿香(潘白山)	24	中華民国湖南省	湖南省立女子師範卒業/日華学校員□東亜高等□□学校において日本語及数学、理科を修業
1922	師範家政学部	1926	翁侃	21	中華民国福建省	福州女子中学校卒業/東亜予備学校へ入学、日本文語その他基礎学科を修めり
1923	師範家政学部	1924	曾兆馨	18	中華民国広東省	三郷中学校卒業
1923	社会事業学部	1927	杜黄貞	24	中華民国吉林省	吉林省女子師範学校卒業
1923	社会事業学部	1924	車秉驊	19	中華民国江西省	魏秀女子中学班卒業
1924	社会事業学部(女工保全科)	1925	呉学謙	19	中華民国安徽省	安徽省立第二女子師範学校卒業
1924	社会事業学部(女工保全科)	1926	陳永貞	18	中華民国福建省	北京女子高等師範学校附属中学校卒業
1924	社会事業学部(女工保全科) 社会事業学部(児童保全科)	1926 1928	張兆喬	17	中華民国広東省	神州女学校卒業
1924	社会事業学部(児童保全科)	1928	楊趙丕頌	29	中華民国雲南省	雲南師範学校卒業
1925	社会事業学部(女工保全科)	1929	邱毓芳	20	中華民国奉天省	奉天女子師範学校卒業
1925	社会事業学部(女工保全科)	1929	孫惠香	19	大連市	同志社女学校普通学部卒業

1925	社会事業学部(児童保全科)	1928	林雪筠	18	中華民國廣東省	山脇高等女學校卒業
1929	社会事業学部(女工保全科)	1933	夏朱明之	22	中華民國湖北省	雲南省立女子師範學校卒業
1929	社会事業学部(児童保全科)	1933	林景晴	23	中華民國廣東新會縣	廣州道根女子師範學校卒業
1930	高等学部文科英文学部 文科国文学部	1933	郭劍兒	21	中華民國廣東南海縣	廣東省立女子師範學校卒業
1930	高等学部文科英文学部 文科国文学部	1931	黄瓊枝	17	中華民國廣東省廣州市	横浜紅蘭女學校卒業
1930	高等学部文科英文学部 文科国文学部	1932	李瓊英	21	中華民國廣東省廣州	廣東省立女子師範學校卒業
1931	国文学部	1931	那淑德	19	中華民國遼寧省	遼寧省立女子師範學校
1934	家政学部第三類	1935	劉佩清	21	中華民國廣東省	中華民國廣東省台山縣立中學高級部卒業
1934	家政学部第三類	1938	黃薔薇	17	中華民國廣東省	中華民國廣東女子師範學校卒業
1935	家政学部第三類	1936	謝福枝	20	中華民國福建省	長崎活水女學校卒
1935	家政学部第三類	1936	劉葆淑	21	中華民國浙江省	上海市東亞體育專科學校卒
1936	英文学部	1938	王琰卿	19	中華民國浙江省	上海市私立中西女子中學校卒業
1937	家政学部第三類	1938	高文溶	19	中華民國福建省	上海中國女子高等中學卒業
1939	家政学部第一類	1942	張湛華	18	中華民國四川省	白百合高等女學校卒業
1940	家政学部第一・二・三類	1941	金似愚	27	中華民國河北省	北京私立華北大學教育專修科卒業
1940	家政学部第一・二・三類	1940	徐竹芳	20	中華民國江蘇省	蘇州女子中學卒業
1940	家政学部第三類	1942	楊鳳喈	17	中華民國上海市	上海南方中學高中部卒業
1940	国文学部 英文学部	1941	白若愚	21	中華民國河北省	北京市立第一女子中學高中卒業
1941	家政学部第一類	1942	魏瑩壁	20	中華民國河北省	河北省立保定女子師範學校卒業
1941	家政学部第一類	1944	姚希嫻	16	中國四川省	本校附屬高等女學校卒業
1941	家政学部第三類	1943	王蘭英	18	中華民國廣東省	廣州第一女子師範學校卒業
1941	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1942	袁晞	18	中國漢口特區二區	漢口市立第一女子中學校卒業
1941	家政学部第三類	1943	石綺琴	18	中國湖北省	漢口聖約□女子高級學校卒業
1941	家政学部第三類	1943	徐應麟	17	中國湖北省	漢口聖約□女子高級學校卒業
1941	家政学部第三類	1943	石綵琴	17	中國湖北省	漢口聖約□女子高級學校卒業
1941	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1944	戴琿	16	中華民國江蘇省	上海幼稚師範學校本科卒業
1941	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1942	陳宏彬	23	中華民國陝西城固縣	北京育華女子中學高中部第三年卒業
1941	国文学部	1944	范競餘	19	中華民國河北省	河北省立師範學校卒業
1942	家政学部第三類	1944	王蕓	20	中華民國河北省	河北省立師範學校卒業
1942	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1945	顏迎蓮	18	中華民國三東省	大連神明高等女學校
1942	国文学部	1945	關瑩	23	中華民國廣東省	南海縣立師範學校高等師範科卒業
1943	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1946	胡蕙芝	20	中華民國河北省	通縣女子師範學校卒業
1943	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1945	葉寧	19	中華民國安徽省	北京興亞高級中學校卒業
1943	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1944	姚希媛	16	中華民國四川省	青島學院絃宇高等女學校卒業
1943	家政学部第三類	1945	盧蕙蘭	19	中華民國廣東省	關東高等女學校卒業
1943	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1943	李秀康	18	中華民國廣西省	月關東高等女學校卒業
1943	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1945	李華玟	16	中華民國湖北省	漢口市立第一女子中學校卒業
1944	家政科 育兒科 管理科	1945	王麗梅	17	北京市	北京市立第四女子中學校卒業
1944	家政科 育兒科 管理科	1946	陳善光	19	中華民國福建省	北京興亞高級中學校
1947	家政科 生活科學科 生活藝術科	1948	葉如玉	17	中華民國台灣省台南縣	東京郡立雪谷高等女學校

## 朝鮮

入学年	入学学部	卒業・退学年	氏名	年齢	出身地	出身校
1920	英文学部	1924	崔寅相(崔述河)	21	朝鮮京城府	京城私立進明女子高等普通学校卒業
1920	英文学部	1922	李鐘肅	20	朝鮮京城府	京城私立進明女子高等普通学校卒業
1921	英文学部	1922	秦淑鳳	21	朝鮮□□郡	記載なし
1921	英文学部	1922	金泰淳	18	朝鮮□□郡	記載なし
1921	英文学部	1926 社会事業学部	李賢卿	18	朝鮮平城	京城府官立女子高等学校卒業/全師範科卒業
1921	社会事業学部	1924	金温順	19	朝鮮平南江西郡	朝鮮京城私立梨花学堂中学科卒業
1922	師範家政学部	1923	呉仁淑	20	朝鮮平壤府	京城進明女子高等普通学校卒業
1922	師範家政学部	1922	閔季植	19	朝鮮忠清北道清州	清州面私立普通学校卒業/京城府私立淑明女子高等普通学校第三学年修業
1922	社会事業学部	1925	崔恩喜	18	朝鮮黄海道	海州私立懿貞女学校中学科卒業/京城官立女子高等普通学校卒業
1922	社会事業学部	1926	黄信徳	21	朝鮮平南平壤府	平壤府私立崇儀女学校(第五学年)卒業/私立千代田高等女学校卒業
1922	社会事業学部	1926	朴命連(朴順天)	21	慶尚南道	釜山府佐川洞私立日新女学校普通科卒業/同校高等科卒業
1923	師範家政学部	1927	柳英春	21	朝鮮平壤府	京城女子高等普通学校師範科卒業/全羅北道全羅普通学校に二か年教員奉職
1924	家政学部	1928	洪順子	16	朝鮮京城府	山口県立長府高等女学校卒業
1924	家政学部	1928	金縣實	20	朝鮮京畿道京城	私立広島女学校卒業
1925	家政学部	1928	田有占	21	平安道平壤府	平壤女子高等普通学校卒業
1925	家政学部	1925	金貞福	16	京畿道京城府	私立梨花女子高等普通学校卒業
1925	師範家政学部	1929	李壽喜	17	朝鮮黄海道	淑明女子高等普通学校卒業
1925	師範家政学部	1930	李承愛	18	朝鮮平安北道	梨花女子普通学校卒業
1925	社会事業学部(児童保全科)	1926	鄭信福	21	朝鮮平壤府	平壤私立崇賢女学校卒業
1925	国文学部	1929	李瑛昉	23	朝鮮平安北道	平壤女子高等普通学校卒業
1925	国文学部	1929	金鳳姫	19	朝鮮京城美州	淑明女子高等普通学校卒業/広島女学校五か年課程修了
1926	師範家政学部	1930	林今世	17	慶尚南道	京城公立女子高等普通学校卒業
1926	社会事業学部(女工保全科)	1927	郭花容	23	朝鮮京城	京城第一公立高等女学校卒業
1926	国文学部	1926	裴小得	17	朝鮮慶尚南道	支那和龍縣私立明東耶穌教学校卒業
1926	英文学部	1931	朴景順	21	朝鮮全羅南道	淑明女子高等普通学校卒業
1926	家政学部	1930	鮮千信永	15	平壤公立高等普通学校卒業	平壤公立高等普通学校卒業
1927	家政学部	1927	李蕙英	20	朝鮮国鎭南道	京城淑明高等女学校卒業/京城女子高等普通学校卒業
1927	家政学部	1927	金三龍伊	20	朝鮮国京城	京城公立女子高等普通学校卒業
1927	師範家政学部	1931	朴福淳	17	朝鮮全羅北道	大阪府宣真高等女学校卒業
1927	国文学部	1929	潘貞輝	22	朝鮮咸鏡北道	淑明高等女学校卒業
1927	国文学部	1929	朴南仁	23	朝鮮咸鏡南道	富士見高等女学校卒業
1927	英文学部	1931	李英照	23	朝鮮慶尚南道	富士見高等女学校卒業
1927	英文学部	1928	韓延子	17	朝鮮京畿道京城府	京城第二公立高等女学校卒業
1927	高等学部文科英文学部	記載なし	崔国卿	20	黄海道	淑明女子高等普通学校卒業
1927	高等学部文科英文学部	1930	金午男	20	朝鮮京畿道	進明女子高等普通学校卒業
1927	高等学部文科英文学部	記載なし	康淑徳	18	朝鮮平安南道	精華高等女学校卒業
1928	家政学部	1929	崔鐘媛	17	朝鮮京城	文華高等女学校卒業
1928	家政学部	1928	姜辰淑	19	朝鮮慶尚南道	富士見高等女学校卒業
1928	師範家政学部	1932	王福姫	18	朝鮮慶尚南道	京城公立女子高等普通学校卒業
1928	高等学部理科化学部	1928	金寶富	17	朝鮮平安南道	岩□高等女学校卒業
1928	高等学部文科英文学部	1928	朴英愛		朝鮮全羅北道	中村高等女学校卒業

1929	国文学部	1933	姜今福	17	朝鮮蔚山郡	大邱公立女子高等普通学校卒業
1929	家政学部	1933	李貴珠	17	朝鮮黃海道海州郡	朝鮮淑明高等普通学校卒業
1929	師範家政学部	1930	徐達壽	20	朝鮮慶尙北道	朝鮮大邱公立高等女学校
1929	高等学部文科英文学部 文科国文学部	1930	郭小其	23	朝鮮本山府	京城第一公立高等女学校卒
1930	英文学部	1934	金順玉	21	朝鮮平壤府	平壤公立女子高等普通学校
1930	英文学部	1934	徐順伊	26	朝鮮慶尙北道	下関梅光女学院
1930	家政学部	1934	朴己淑	20	朝鮮東萊郡東萊	広島女学院
1930	師範家政学部	1932	李五基	18	朝鮮忠清北道	進明女子高等普通学校
1930	社会事業学部(女工保全科)	1934	卓福守	16	朝鮮慶尙南道	淑明高等普通学校
1930	高等学部理科化学部	1931	金福分	18	朝鮮慶尙南道	大邱公立高等普通学校卒
1930	高等学部理科化学部	1935 英文学部	崔世紋	27	朝鮮黃海道	中村高等女学校卒
1930	高等学部文科英文学部 文科国文学部	1936 国文学部	諸一女	21	朝鮮慶尙南道	大邱公立女子高等普通学校
1931	家政学部第二類	1935	尹畢達	19	慶尙南道	大邱公立女子高等普通学校
1931	家政学部第二類	1935	朴英姬	18	京城府蓮池洞	京城公立女子高等普通学校
1931	家政学部第一類	1935	高泰子	17	京城府	淑明高等普通学校
1932	英文学部	1936	池榮福	16	朝鮮平安南道	平壤公立女子高等普通学校
1932	家政学部第二類	1937	孔昌姪	17	朝鮮開城府	京城公立女子高等普通学校卒業
1932	家政学部第二類	1932	崔善学	17	朝鮮慶尙北道	京城公立女子高等普通学校卒業
1932	国文学部	1937	金永實	17	朝鮮全羅北道	朝鮮梨花女子高等普通学校卒業
1933	家政学部第二類	1937	韓福壽	18	朝鮮平壤府	平壤公立女子高等普通学校
1933	家政学部第二類	1937	閔丙禮	16	朝鮮京城府	朝鮮京城同德女子高等普通学校卒業
1933	家政学部第二類	1933	朴思禮	17	朝鮮慶尙南道	岡山県立笠岡高等女学校卒業
1933	家政学部第三類	1935	鄭点伊	17	朝鮮慶尙南道	朝鮮晋州一新女子高等普通学校卒業卒業
1933	家政学部第三類	1934	河小蘭	20	朝鮮慶尙南道	同德女子高等普通学校卒業
1933	家政学部第三類	1934	玉仙	17	朝鮮慶尙南道	朝鮮京城培花女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第三類	1935	劉鶴順	25	朝鮮黃海道	岩佐高等女学校卒業
1934	家政学部第一類	1934	金貴口	19	朝鮮京畿道京城府	朝鮮進明女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第一類	1938	吳再念	17	朝鮮黃海道	朝鮮好壽敦女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第二類	1935	金鳳善	17	朝鮮平安北道	朝鮮新義州公立高等女学校卒業
1934	家政学部第二類	1934	金福順	18	朝鮮咸鏡北道	朝鮮元山樸氏女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第二類	1937	洪瓊珠	18	朝鮮平安北道	朝鮮京城梨花女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第二類	1934	車元善	16	朝鮮平安南道	朝鮮平壤公立女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第二類	1935	沈点順	17	朝鮮全羅南道	朝鮮光州公立女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第二類	1935	鄭甫永	16	朝鮮全羅南道	朝鮮光州公立女子高等普通学校卒業
1934	家政学部第二類	1938	田垂禮	17	朝鮮元山府	岡山県清心高等女学校卒業
1934	家政学部第二類	1936	朴恩禮	18	朝鮮慶尙南道	岡山県笠岡高等女学校卒業
1934	家政学部第二類	1935	朴金男	19	朝鮮咸南咸興府	朝鮮永興永生女子高等普通学校卒業
1935	家政学部第一類	1937	韓午榮	16	朝鮮忠清南道	淑明女子高等普通学校卒
1935	家政学部第一類	1935	金淑瀾	19	朝鮮京城府	平壤公立女子高等普通学校卒
1935	家政学部第一類	1935	朴桂奉	17	朝鮮全羅北道	同德女子高等普通学校卒
1935	家政学部第一類	1935	李敬伊	20	朝鮮慶尙南道	一新女子高等普通学校
1935	家政学部第二類	1935	韓亨淑	17	朝鮮忠清南道	培花女子高等普通学校卒業
1935	家政学部第二類	1939	金香子	18	朝鮮全羅北道	全州公立女子高等普通学校卒業
1935	家政学部第二類	1935	崔嶸祥	18	朝鮮	哈爾濱北滿第一女子中学校卒業
1935	家政学部第二類	1936	朴英姬	16	朝鮮京畿道開城府	好壽敦女子高等普通学校卒
1935	家政学部第二類	1939	朴楠吉	18	朝鮮京畿道京城府	京城公立女子高等普通学校卒業
1935	家政学部第二類	1935	文正元	15	朝鮮京畿道京城府	同德女子高等普通学校卒業
1935	家政学部第二類	1939	柳玉女	19	朝鮮全羅北道	淑明女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第三類	1939	李鳳愛	20	朝鮮京畿道京城府	同德女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第一類	1936	李貞子	16	朝鮮黃海道	淑明女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第一類	1936	姜榮順	18	朝鮮京城府	淑明女子高等普通学校卒業

1936	家政学部第二類	1941	禹孝金	18	朝鮮全羅北道	同徳女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1940	金鐘禮	18	朝鮮全羅北道	全州公立女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1936	崔順相	17	朝鮮慶尚南道	晋州一新女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1940	崔愛卿	18	朝鮮黄海道	海州公立高等女学校卒業
1936	家政学部第二類	1940	全季祚	18	朝鮮慶尚北道	大邱公立女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1938	宋斗云	16	朝鮮慶尚南道	釜山公立女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1936	馬順男	20	朝鮮慶北尚州	京城同徳女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1936	朴貴南	16	朝鮮黄海道	京城公立女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1936	朴來賢	15	朝鮮平安南道	全州公立女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1936	李点鳳	17	朝鮮京城府	台中州立彰化高等女学校
1936	家政学部第二類	1938	李任壽	15	朝鮮慶尚南道	一新女子高等普通学校卒業
1936	家政学部第二類	1940	李南喆	17	朝鮮慶尚南道	一新女子高等普通学校卒業
1937	国文学部	1937	李貞洙	18	朝鮮咸鏡南道	梨花女子高等普通学校卒業
1937	英文学部	1937	金五徳	17	朝鮮平安南道	平壤公立女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1938	尹明淑	17	朝鮮京城府	梨花女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1938	金周敬	16	朝鮮平安南道	平壤公立女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1937	張惠玉	15	朝鮮平安北道	淑明女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1941	鄭寬榮	18	朝鮮慶尚南道	光州公立女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1937	朴容順	18	朝鮮京城府	淑明女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1941 第一類卒	梁祐錫	16	朝鮮京畿道	梨花女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1938	李今女	21	朝鮮京畿道京城府	荒川高等女学校卒業
1937	家政学部第二類	1938	劉再玉	16	朝鮮忠清北道	永生女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第一類	1937	金榮嬉	17	朝鮮咸鏡南道	永生女子高等普通学校卒業
1937	家政学部第二類	1937	姜尚信	17	朝鮮慶尚南道	京城公立女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第二類	1940	■■■■■	17	朝鮮江原道	梨花女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第一類	1941	吳在元	16	朝鮮黄海道	梨花女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1939	崔華實	16	朝鮮黄海道	梨花女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1938	李龍成	16	朝鮮黄海道	梨花女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第二類	1941	金静録	15	朝鮮平安南道	平壤公立女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第二類	1941	金明賢	17	朝鮮平安南道	正義女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第二類	1941	金羅悦	16	朝鮮京畿道	光州公立女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第二類	1941	趙昌淑	17	朝鮮平安南道	進明女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1940	趙福愛	16	朝鮮慶尚南道	淑明女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第三類	1941	黃珪貞	17	朝鮮咸鏡南道	咸興公立高等女学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1940	趙淑姬	16	朝鮮京城府	同徳女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第三類	1941	崔英熙	16	朝鮮京畿道	同徳女子高等普通学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1941 第三類	朴姪淳	15	朝鮮平安北道	梨花女子高等普通学校卒業
1938	英文学部	1942	韓道王	17	朝鮮平安南道	正義女子高等普通学校卒業
1939	家政学部第一・二・三類	1940	金良淑	15	朝鮮京城府	京畿公立高等女学校卒業
1939	家政学部第一・二・三類	1941	許占惠	15	朝鮮慶尚南道	鳳山高等女学校
1939	家政学部第二類	1942	金瑠熙	18	朝鮮京畿道京城府	淑明女子高等女学校卒業
1939	家政学部第二類	1942	李粉羲	16	朝鮮慶尚南道	梨花高等女学校卒業
1939	家政学部第二類	1942	李仁喜	17	朝鮮京畿道京城府	京畿公立高等女学校卒業
1939	家政学部第一・二・三類	1940	李康子	17	朝鮮京畿道京城府	普連土女学校卒業
1939	家政学部第一・二・三類	1940	金師任	18	朝鮮江原道	淑明高等女学校卒業
1939	国文学部 英文学部	1939	吳庚玉	18	朝鮮京城府	記載なし
1939	国文学部 英文学部	1942	張斗杓	17	朝鮮咸鏡南道	棲枝高等女学校卒業
1940	家政学部第一類	1943	許淑子	17	朝鮮京畿道京城府	淑明高等女学校卒業
1940	家政学部第一類	1943	車元子	17	朝鮮江原道	淑明高等女学校卒業
1940	家政学部第一類	1943	柳次男	17	朝鮮全羅北道	全北公立高等女学校卒業

1940	家政学部第一・二・三類	1941	金淑在	17	朝鮮咸興府	同德高等女學校卒業
1940	家政学部第一類	1943	金貞姬	16	朝鮮京畿道京城府	同德高等女學校卒業
1940	家政学部第一・二・三類	1942	金仁實	16	朝鮮平安北道	京畿公立高等女學校卒業
1940	家政学部第二類	1943	高仁淑	17	朝鮮江原道	京畿公立高等女學校卒業
1940	家政学部第一・二・三類	1941	吳寅實	16	朝鮮平安北道	平壤西門高等女學校卒業
1940	家政学部第一・二・三類	1943	李淑姿	17	朝鮮黃海道	進明高等女學校卒業
1940	家政学部第二類	1943	李瑋烈	16	朝鮮京城府	同德高等女學校卒業
1940	家政学部第三類	1943	李南順	17	朝鮮慶尚南道	同德高等女學校卒業
1940	家政学部第一・二・三類	1940	林春南	19	朝鮮全羅道	淑明高等女學校卒業
1940	家政学部第三類	1942	趙福女	18	朝鮮平安南道	岩佐高等女學校卒業
1940	家政学部第三類	1942	李銀熙	16	朝鮮平安南道	正義高等女學校卒業
1940	国文学部 英文学部	1940	宋仁鳳	17	朝鮮黃海道	京畿公立高等女學校卒業
1941	家政学部第一類	1944	■■■■■	17	朝鮮咸興府	咸南公立高等女學校卒業
1941	家政学部第二類	1944	■■■■■	16	朝鮮開城府	京畿高等女學校
1941	家政学部第二類	1942	■■■■■	16	朝鮮忠清南道	淑明高等女學校
1941	家政学部第二類	1944	■■■■■	18	忠清北道	進明高等女學校
1941	家政学部第二類	1942	■■■■■	16	朝鮮平壤府	平壤西門公立高等女學校
1941	家政学部第二類	1944	■■■■■	18	朝鮮忠清南道	淑明高等女學校
1941	家政学部第二類	1944	李昌宰	18	朝鮮慶尚北道	淑明高等女學校
1941	家政学部第三類	1943	■■■■■	15	朝鮮咸鏡南道	咸南公立高等女學校卒業
1942	家政学部第一類	1946	■■■■■	16	朝鮮平安南道	正義高等女學校卒業
1942	家政学部第二類	1946	■■■■■	15	朝鮮慶尚北道	慶北公立高等女學校卒業
1942	家政学部第三類	1944	■■■■■	16	朝鮮平壤府	京畿公立高等女學校卒業
1946	家政科 児童学科 管理科 家政理科(物理化学専攻)(生物農芸専攻)	1948	■■■■■	16	朝鮮慶尚北道	千葉県立松尾高等女學校卒業
1947	家政科 児童学科 社会福祉科	1949	全金姬	19	朝鮮慶尚南道	私立松蔭女子商業學校卒業

台湾

入学年	入学学部	卒業・退学年	氏名	年齢	出身地	出身校
1925	家政学部	1929	呂鏡屏	16	台湾台中豐原郡	私立淡水女學院卒業
1926	師範家政学部	1930	江氏秩	18	台湾台中市	本校附属高等女學校卒業
1926	社会事業学部(児童保全科)	1930	林晶晶	18	台北州台北市	台北第三高等女學校卒業
1927	社会事業学部(女工保全科)	1928	林開關	21	台湾台中市	台南長老女學校卒業
1927	社会事業学部(女工保全科)	1928	甘寶叙	20	台湾台中市	彰化女子高等普通女學校卒業
1927	社会事業学部(女工保全科)	1929	劉氏瓊瑛	20	台湾台中	上野高等女學校卒業
1927	高等学部理科化学部	1930	劉彰仁	18	台湾台南市	同志社女學校卒業
1928	家政学部	1932	洪氏彬	17	台湾台中市	台中州立彰化高等女學校卒業
1929	師範家政学部	1932	吳氏錦雀	19	台南市	台南州立台南第二高等女學校卒業
1929	国文学部	1933	顏氏碧霞		台北州基隆市	記載なし
1929	高等学部理科化学部	1935	魏阿純	15	台湾台中市	富士見高等女學校卒業
1930	国文学部	1932	張氏女英	16	台湾台南州	台南州立嘉義高等女學校
1930	師範家政学部	1931	顏氏媿	18	台湾台北州其隆市	京都市立二條高等女學校
1930	師範家政学部	1934	劉憐敏	19	台湾台南市	同志社女學校高等女学部
1930	大学本科学部	1931	劉彩仁	21	台湾台南市	本校高等学部卒
1931	国文学部	1935	張氏娥	18	台湾台北市	台北州立台北第三高等女學校/常盤松高等女學校
1931	家政学部第二類	1935	劉氏秀霞	16	台南市	州立台南第一高等女學校
1931	家政学部第一類	1935	王氏錦香	16	台南市	台南第二高等女學校
1931	家政学部第一類	1932	陳氏明珠	17	台中市能高郡	台中州立彰化高等女學校

1931	社会事业学部	1932	徐氏朗玉	21	台南州嘉義市	州立台北第三高等女学校
1932	家政学部第二類	1934	陳氏吟	18	台湾台中州	台中州立彰化高等女学校卒業/全校補習科卒業
1933	国文学部	1937	周氏繡	16	台湾台北州台北市	台北第三高等女学校卒業
1934	家政学部第三類	1934	林氏淑媛	18	台湾高雄州	岩佐高等女学校卒業
1934	家政学部第一類	1937 第三類	郭氏玉直	17	台北市	台北州立第三高等女学校卒業
1934	家政学部第一類	1936	吳氏味	16	台湾新竹州	台湾新竹高等女学校卒業
1934	家政学部第一類	1935	盧氏玉美	16	台中州台中市	台湾彰化高等女学校卒業
1935	家政学部第一類	1935	姜氏蘭英	17	台湾新竹州	新竹州立新竹高等女学校卒業
1935	家政学部第一類	1939	蔡氏貞	17	台湾新竹州	新竹州立新竹高等女学校卒業
1935	家政学部第一類	1936	賴氏夔鳳	18	台湾台中州	台中州立台中高等女学校
1935	家政学部第二類	1939	許氏月桂	16	台湾新竹州	新竹州立新竹高等女学校卒業
1935	英文学部	1936	林氏綠波	17	台湾台北州	台北州立第一高等女学校卒業
1936	家政学部第三類	1939	林氏探瑾	17	台湾台中州	堀越高等女学校卒業
1936	家政学部第一類	1940	張氏彩霞	16	台湾台北州	台北第三高等女学校卒業
1936	家政学部第一類	1940	李氏怡怡	16	台湾台北州	州立台北第三高等女学校卒業
1936	家政学部第二類	1940	邱氏素娥	16	台湾台南州	台南州立台南第一高等女学校卒業
1936	家政学部第二類	1938	張氏愛信	17	台湾台中州	台中州立台中高等女学校卒業
1936	家政学部第二類	1938	彭氏靜香	16	台湾高雄州	高雄州立高雄高等女学校
1936	家政学部第二類	1936	楊氏秀香	17	台湾台中州	台中州立彰化高等女学校卒業
1937	家政学部第三類	1940	王氏彩雲	18	台湾台南州	州立台南第二高等女学校卒業
1937	英文学部	1941	饒氏菊枝		台湾花蓮港	記載なし
1937	家政学部第二類	1937	陳氏貞子	16	台湾台中州	台中州立台中高等女学校卒業
1938	家政学部第一、二、三類 国文学部 英文学部	1940	■■■■■	17	台湾台南州	台南州立嘉義高等女学校卒業
1938	家政学部第二類	1941	劉氏秀華	16	台湾台南州	州立台南第一高等女学校卒業
1938	家政学部第三類	1941	高久鷺寫	16	台湾台中州	台中州立彰化高等女学校卒業
1938	家政学部第三類	1941	涂氏玉英	17	台湾新竹州	高雄州立屏東高等女学校卒業
1938	家政学部第三類	1941	李氏珊瑚	17	台湾台北州	台北州立第三高等女学校卒業
1938	英文学部	1943	蔡氏淑	16	新竹州	新竹州立新竹高等女学校卒業
1939	国文学部	1942	施氏麗琴	17	台湾台南州	州立台南第二高等女学校卒業
1940	家政学部第一類	1943	顏氏瑞珠	16	台湾台北州	台北州立基隆高等女学校卒業
1940	家政学部第一、二、三類	1940	林氏苑玉	17	台湾新竹州	台北州立第三高等女学校卒業
1940	英文学部	1943	楊翠霞	18	台湾台中市	牛込高等女学校卒業
1941	家政学部第一類	1941	賴氏月娟	17	台湾台中市	台中州立台中高等女学校卒業
1941	家政学部第三類	1943	邱氏玉燕	17	台湾台中州	台中州立彰化高等女学校卒業
1941	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1941	林氏苑玉	18	台湾新竹州	台北州立台北第三高等女学校卒業
1942	家政学部第一類	1945	顏氏瑞微	16	台湾台北州	台北州立基隆高等女学校卒業
1942	家政学部第一類	1943	■■■■■	16	台湾台北州	台北州立基隆高等女学校卒業
1942	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1945	張氏婷婷	19	台湾台南州	陽友学園高等女学校卒業

満州

入学年	入学学部	卒業・退学年	氏名	年齢	出身地	出身校
1931	国文学部	1936 卒業学部不明	孫凌雲	20	満州国吉林省	吉林省立女子師範学校
1933	家政学部第一類	1937 第三類	劉淑芬	17	満州国吉林省	満州国吉林省立女子中学校卒業
1933	家政学部第三類	1936	李恩華	21	満州国吉林省	吉林省立女子師範学校卒業
1933	家政学部第三類	1936	馬鳴鶴	18	奉天省	奉天高等女学校卒業
1934	家政学部第三類	1937	金安恕	17	満州国奉天省	北平女子大学高中部卒業
1934	家政学部第三類	1937	曲淑玲	21	満州国吉林省	旅順師範学堂

1934	家政学部第三類	1936	干博敏	18	満州国奉天瀋陽県	奉天省立女子師範学校卒業
1934	家政学部第三類	1934	朱若水	22	満州国吉林省	吉林省立女子中学校卒業
1934	家政学部第三類	1937	周淑身	22	満州国吉林省	吉林省扶餘県公立女子師範学校卒業
1934	家政学部第三類	1934	鄒樹人	17	満州国奉天省	満州国奉天女子師範学校卒業
1934	家政学部第三類	1936	趙書雲	18	満州国吉林省	靑安女子中学校卒業
1934	家政学部第三類	1935	趙敏	20	満州国吉林省	吉林省立女子師範学校卒業
1934	家政学部第三類	1938	林湘韻	18	満州国吉林省	吉林省立女子中学校卒業
1934	家政学部第三類	1937	武仲梅	17	満州国奉天省	奉天省立女子師範学校卒業
1934	家政学部第三類	1935	劉筠玉	18	満州国奉天省	奉天女子師範学校卒業
1934	家政学部第三類	1938	鞠英華	18	満州国吉林省	北満特区女子第一中学校修了
1934	家政学部第二類	1938	王瑤琨	19	満州国奉天省	北京市立北方中学校卒業
1934	家政学部第二類	1938	金淑吾	19	奉天省遼陽県	奉天省立女子師範学校卒業
1934	家政学部第二類	1938	梁清彦	17	満州国黒竜江省	北満州特別区第一女子中学校
1935	家政学部第二類	1939	白英忱	15	奉天省瀋陽	奉天女子師範学校卒業
1935	家政学部第三類	1938	張春茹	19	奉天省	奉天女子職業学校卒業
1936	家政学部第三類	1939	張淑貞	19	満州国瀋江省	北満区立第一女子中学校高中文科卒業
1936	家政学部第三類	1939	右如塵	20	満州国錦州省	哈爾賓特別区立第一女子中学校高中部卒業
1936	家政学部第三類	1939	崔籍英	19	満州国龍江省	哈爾賓特別区立第一女子中学校高中文科卒業
1936	家政学部第二類	1937	吳麗生	18	満州国奉天省遼陽県	奉天省立女子師範学校卒業
1936	家政学部第二類	1940	趙秀芳	18	満州国瀋江省	北満特別区立哈爾賓第一女子中学校卒業
1936	家政学部第二類	1940	趙静言	17	満州国奉天省	奉天省立女子師範学校卒業
1937	家政学部第三類	1937	王淑雲	20	満州国奉天省	奉天省立女子師範学校卒業
1937	家政学部第三類	1940	馮春芬	18	満州国奉天省	桜蔭高等女学校卒業
1937	家政学部第三類	1940	鄒子芳	18	満州国瀋江省	靑安縣西江沿女子兩級中学校卒業
1937	家政学部第三類	1940	梁國英	19	満州国瀋江省	哈爾濱第一兩級女子中学校卒業
1937	家政学部第二類	1938	劉菊榮	18	満州国普蘭	旅順高等女学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1941 第三類	阮守蘭	18	奉天省	奉天省立女子師範学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1941 第三類	増鍾記	20	満州国錦州省	奉天省立女子師範学校卒業
1938	家政学部第三類	1941	閻慧芳	17	満州国奉天省	營口縣立女子高級中学校卒業
1938	家政学部第一・二・三類 国文学部 英文学部	1939	吳麗生	20	満州国奉天省	奉天省立女子師範学校卒業
1938	家政学部第三類	1941	博丕容	18	満州国興安南省	奉天省立女子師範学校卒業
1940	家政学部第三類	1942	邊寶賢	19	満州国奉天省	瀋江省立哈爾濱女子兩級中学校卒業
1940	家政学部第三類	1942	黄金玉	18	満州国間島省	記載なし
1941	家政学部第三類	1943	閻家慧	17	関東州金州城内	大連神明高等女学校卒業
1941	家政学部第三類	1943	趙文齡	17	満州国吉林省	関東高等女学校卒業
1941	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1946	張蘿瑛	17	満州国奉天省	新京敷島高等女学校卒業
1942	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1944	徐純子	17	関東州大連市	大連弥生高等女学校卒業
1943	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1946	張蘊琦	17	満州国奉天省	新京敷島高等女学校卒業
1943	家政学部第三類 国文学部 英文学部	1944	楊樹媛	19	満州国奉天省	同志社高等女学校卒業

その他

入学年	入学学部	卒業・退学年	氏名	年齢	出身地	出身校
1929	社会事業学部(女工保全科)	1934	劉順	17	東京市四谷区	大連高等女学校卒業
1936	家政学部第二類	1941	ハカスワナ・ラッダー	16	タイ国チャンタブリ市	サイパン・ハイスクール卒業

1944	家政科 育児科 管理科	1945	丁瑞蘭	21	蒙疆張家口市	北京市立第四女子中学校/蒙口市善隣回民女塾師範部卒業
1944	家政科 育児科 管理科	1945	チュムシンナナコーン	17	泰国バンコック	国際学友会日本語学校修了
1944	家政科 育児科 管理科	1945	ファンテイリー	21	安南ハノイ・ルシヤルボン	仏印ハノイ女学校

予科

入学年	入学科	修了・退学年	氏名	年齢	出身国	出身校
1907	英文学部予備科	1908	林復	18	清国福建省	清国上海愛国女学校尋常科修了/東京大成学校にて日語と普通学と習う/私立女子英学塾予科に入り(二年)修業
<b>1907</b>	<b>大学普通予科</b>	<b>1908</b>	<b>楊敢平</b>	<b>16</b>	<b>清国広東省</b>	<b>実践女学校卒</b>
<b>1907</b>	<b>大学普通予科</b>	<b>1908</b>	<b>康同荷</b>	<b>15</b>	<b>損国広東省</b>	<b>実践女学校卒</b>
1908	英文学部予備科	1913	李元	16	清国湖北省	東京府立第一高等女学校四年修業
<b>1908</b>	<b>大学普通予科</b>	<b>1909</b>	<b>陳夢飛</b>	<b>16</b>	<b>清国広東省</b>	<b>実践女学校卒</b>
<b>1908</b>	<b>大学普通予科</b>	<b>1909</b>	<b>馬君幹</b>	<b>22</b>	<b>清国安徽省</b>	<b>青山女学院にて日語修業</b>
1909	英文学部予備科	1910	劉芸郷	24	清国江西省	記載なし
1909	英文学部予備科	1909	邱新榮	17	清国広東省	実践女学校
1909	英文学部予備科	1910	黄輝	18	清国湖南	実践女学校留学生部工芸師範部卒
<b>1909</b>	<b>英文学部予備科</b>	<b>1910</b>	<b>黄国翼</b>	<b>19</b>	<b>清国湖南</b>	<b>実践女学校留学生部中学卒</b>
1909	英文学部予備科	1910	曾尚武	19	清国湖北省	東洋女芸学校畫科卒
1913	英文学部予備科	1915	桂円成	25	支那江西省	記載なし

『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかった新資料を順次発表する。今回は講話二編である。式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話 1

## 第一学年に於て — 明治四十三年五月十四日 —

今日は運動会で、此の時間を用ふことは六かしいであろーと考へましたが、天氣の都合で実践倫理を説くこととなりましたから、今日私は、あなた方の態度を確定したい。之は自動的修養にも大切であるし、且つ私の健

康の上にも必要であると考へます。私が未だ疲れて居りますので充分声を使ふことが出来ませんから、成るべくあなた方が注意をなさって、お働きになる様に。そして問答の様にしたいと考へます。

私の留守中に、キング博士並に Chicago 大学のスター博士が話をしたそゝであります。其の英語は皆わかると云ふ訳にはゆきませんが、通弁があつたから大体はわかつたであらうと思ひます。

始めに、キング博士のお話の大体おわかりになつた方は……… 其の精神はどゝ云ふ点にあつたか、一寸答への出来る方は………

・一口に申せば、善は最善の敵であると云ふことになりませう。

次に、スター博士の話の意味のわかつたお方は………

夫れはどゝ云ふ風におとりになつたか、意味の言へるお方は………

### 知識教育

皆さんは此の学校にお入りになつて、是迄余り考へなかつた又充分経験しなかつた、も一つ広い方面をお聞きになり又目撃なさり、且つ大隈伯、渋澤男爵、森村市左衛門氏、其の他そゝ云ふ様な経歴のある人に接する機会を得て、其のお方の考へ、並びにそゝ云ふお方の態度などについて、いろいろ感ずるところがあつたに違ひない。又外国の人も段々此校へ来て話をせられて、そゝ云ふ新

らしい空氣に触れて、何かの反応があなた方に起るべきであると私は予期して居るのである。此の前も少し、そゝ云ふ様な事について試みたのでありますが、あなた方は今日迄自分の受けて来た経歴、及び今日の日本の教育の傾きを考へて見るならば、之を先づ知育知識の教育と言ふのである。成るべく多く知る、成るべく覚えると云ふことです。

### 実用的教育

夫れから、も一つの傾向は機械的教育、或は実用教育と云ふことになる。実用教育と言へばもつとよい意味もあるが、つまりいろいろな技芸を覚えて、人間を機械とするに必要な教育をするのである。自分と云ふ人格の爲でなくして、或る方便、或る機械となる方便の教育、之が世間で言ふ実用的教育のことになります。

### 意志教育

第三は意志の教育、人格の爲の教育である。之について必要なることを、キング博士もスター博士も言ふたのではないかと考へます。且つ此の学校へお入りになつて、

他の学校と少し変つて居る。只本を読むだけではない。

行はねばならぬ。只自分の為ばかりではなく、何かを人に尽して行かねばならぬ。又、只物を覚えて居るばかりではない。何かをしなければならぬ。つまり、是迄の学校教育に余り経験のないことを味ふたことと思ふ。そこで私は少し、あなた方に聞いて見たい。我が国の今日の教育と云ふものは、今申した三つの中の何れに傾いて居るとお考へですか。

・先づ我が国の大体の教育は博識にする、知識の教育に偏して居ると思ふ者は……………

・第二の機械的教育に傾いて居ると思ふものは……………

・人格の為の教育であると思ふものは……………

### 女徳の第一は柔順

是迄の教育は、婦人の徳。之は誠に我が国の美風であるから、之をこはしてはならぬと云ふことを此の間も申したから、皆さん誤解はないと思ひますが、此の女徳の第一は柔順である。

### 婦人三従の教へ

然るに婦人に高等の教育をあたへるのは、婦人も人である、不思議な力がある、と云ふ自覚を与へるから、其の結果不柔順になる。そこで女子教育は知らしむ可らず、依らしむべしと云ふ考へがある。そして婦人は三従と言って、幼にしては親に従ひ、嫁しては夫に従ひ、老いては子に従ふと云ふ風に、何時も人にたよつてばかり来たのであります。

### 運命の開拓

そこで我が意志を養ひ、我が人格を發揮すると云ふことではなく、唯だ人による、始終何かの方便として教育せられて来たのである。故に之れが教育であり、こゝ云ふのが我が国婦人の運命であると皆考へて居つたのである。併し私は、是迄幾千年間人類が経験を積んで見まして、仮令女子と云へども他人に依頼すると云ふ考へでは到底満足することは出来ぬ。どゝしても我が意志を以て、我が運命を開拓することが出来る様にならねば、眞の満足を得ることは出来ぬ。又ほんとの女徳を養ふことも出来ぬと云ふことを、此の間少し申しかけておきました

が、あなた方は其の態度をお養ひになることが出来たであ  
りましょーが、もー一つお尋ねをします。私が此の間  
から申しかけたことには哲学上の深い考へもあり、宗教  
の關係も其の中にあるのですが、そー云ふ深い事をお尋  
ねするのではない。其の中で意志と云ふことだけでもわ  
かった方は……………

### 宗教につきて

宗教と云ふことでも、教会に入つて儀式を行つて居る  
ことと思つて居る人もあろー。又そー云ふことではなく、  
信仰を持つて立つことと解して居る人もあろー。Christ  
教でも仏教でも又は我が国の神道でも孰れの宗教でも宜  
しいが、自分は一つの宗教上の信仰に生きて居ると言は  
る、お方は……………

### 各自の修養につきて

又宗教と云ふものには依らないが、自分の修養と云ふ  
ものは、一つの主義を以て充分自覚しよーと云ふ処に迄  
精神的に行つて居ると云ふ、其の意味に於て信念を持つ  
て居る人は……………

大体わかりました。夫れに由つて私の申す意志と云ふ  
ことも、多分おわかりになるであろー。そーして態度の  
さまつて居ることは、私の喜ぶ所であります。併しもー  
一つお尋ねすることは、其の態度、其の信仰が時々刻々  
の実行の上に現れて居るかどーかと云ふことであります。  
之は只修養する、実践倫理の時間、又は其の実践倫理の  
研究会と云ふ様な時間に於てのみ修養をするのではなく、  
飯令家に於て煮炊きをする時でも、針を持つて縫ひ物を  
する時にも、其の他課業に出る時にも、筆を持つて字を  
書く時にも、お友達とお話をする時にも、始終其の態度  
が我々の行ひの上に現れなければならぬ。之を少し具体  
的に問答して見たいと思ひますが……………

### 意志の肝要

其の学問を使ひ、其の自分の技能を支配して行く時に  
も、やはり自分の意志を以て意志の支配を受けて行くこ  
とが肝要である。此の意志の教育と云ふことは、我々の  
内にある偉大なる力の本となる。凡て我々の主眼は其処  
におかねばならぬと云ふ考へを以て、常に此の意志の教  
育を目的として、人格発現を本として、始終此の意志の  
鍛鍊と云ふことに勉めて居ると云ふことに、お答への出

来る人は……………

### 人格教育の目的を達せしむるには如何なる道を選ぶべきか

夫れでは私は是れ迄、只物を知ると云ふ教育に欠けて居った処を補ふて、人格教育と云ふことをして行くには、どー云ふことが大切であるか。其の目的を達するには、どの道をとつたらよかるか。其処に行く道は、どー云ふ仕方をしなければならぬか。或はどー云ふ態度をとらねばならぬか。今あなた方の一番大切だと思ふて居ることを言つて御覧なさい。

・常に我が身を反省して、まことを追求すべきこと。  
其処に行くのに、どーも甚だ六かしいことがある。今、自分が行きなやんで居るとか、何か困難を感じて居るお方は……………

・感情に支配され易きこと。

今、感情に支配せらるゝと云ふことが出ましたが、感情と言へば誠に広いことで、其の中には苦みもあれば、恐れもある。嫉みもあれば、虚栄もある。之は仏教の方で言へば、其の宗教の御本尊も、人間の総ての苦みは、社会の総ての罪悪の本は皆人間の煩惱であるから、救ふ

と云ふのは之を退治て克たせるのである、と言はれました。之は Christ も釈尊も同じことである。そこで我々の心の中に苦みがあるならば、未だそー云ふものに克つ得ないと云ふ証拠であります。然らば皆さんに聞きますが、我々はそー云ふ欲に克ち得らるゝものでありましょーか。如何でしよー。其の欲が自分を虜にする。そー云ふものに苦むと云ふことはない。夫れよりも尊い意志が充分あなたを支配して居ると云ふだけに、意志の働きの出来て居る人は……………

未だ意志の弱いと感ずる者は……………全体

### 克己心

夫れであるから、口に言ふことは易い。本に読むことは楽であるけれども、夫れを人格に現す、ほんとーに実践躬行すると云ふことは六かしいのである。そこで此の意志を養ふために、昔から克己と云ふこと、己に克つと云ふことを言ひますが、之が極端になつて禁欲主義になると、もー間違ひであります。けれども克己と云ふことは必要である。此の克己と禁欲との区別のわかつて居る方は……………

## 意志並に克己

此の間、自分と云ふことを言ひましたね。一番低い自我は何でしたか。そー、身体的自我。夫れから精神的自我迄の間に、本能我、感情我、知的我と云ふよーなものがある。そーすると、我々にはそれだけの傾きがある。酒飲みは酒の欲に従つて健康を害するのみならず、其の為に職務を怠り、乱暴をする。其の酒の欲を制するのは何であるか。意志である。其の一つ一つの欲に克つて、意志を以て支配する。之を克己と言ふのであります。

昔の詞に、一難を経る毎に一倍し来る、と言ふことがあります。我々の勇氣は困難を通過する毎に、勇氣が倍して来るのであります。夫れを親が姑息の愛を以て育てる時には、物事は出来ぬ。他家に嫁しても家がよく治まらない。何となれば、我が儘であるのみならず、依頼心があつて始終親や夫に要求するから、我が身を忘れて家の為に、親の為に、夫の為に、子の為に尽すことは出来ぬ。お釈迦さんでも王の太子と生れ、金殿玉楼に住んで栄華を事として居られたなら、一切衆生を救ふことは出来なかつたのである。然るに世の叫びに応じて我が生れて来た天職を果さんが為に、我が生れた栄華を捨て、王位を捨て、自ら難行苦行の功を積まれたればこそ、斯く

の如く大きな人格が現れたのである。其の他 Christ にしても Socrates にしても孔子にしても、皆いろいろな困難にあふて居られる。そー云ふ様に、意志を以て制御して行くのが克己であります。皆さんもいろいろな困難があろー。けれども夫れに打ち勝つて道理に従ふ、意志の支配に由つて生活すると云ふ態度にならねば、到底意志の教育は出来ぬ。夫ればかりではない。やはり満足と云ふこともなければならぬけれども、意志を以て制して行くと云ふ生活も出来ねばならぬ。どーでありましょーか。皆さん、我々はそー云ふ生活も始めて居りますと言はる、人は……………

始めのうちには困難もありましょー。けれども夫れが出て来る様にならねばならぬ。

## 体育に就きて

夫れから皆さん、体育と云ふことにもお尽しになつて居りましょーが、此校の運動は唯だ体操をすると云ふばかりではなく、体育に由つて健康の増進を計ると共に、意志の働きを発揮する様にしなければならぬ。

## 意志と筋肉

夫れをするに、先づ私共の一番気をつけねばならぬことは、此の身体である。我々の身体は全く意志の支配に由るものである。そこで或る人は、Will………即ち我々の身体を建築するものは意志である、と言つて居ります。夫れで私共は運動についても、やはり之を精神的にしななければならぬ。今は宗教の中でも少し形式になつたものもあるけれども、たとへば仏教では行をすると云ふことがあつて、印度あたりでは、或る行者は十年間手を挙げて居ると云ふことがあります。禪宗には座禪をすると云ふことがあります。我が国の神道には、筋肉を制して深呼吸をすると云ふこともあるのです。宗教には大分、身体を教育することがある。之等は、本は意志の働きを筋肉の上に発表すると云ふことにあるので、意志と云ふものは必ず筋肉の上に現れるのである。故に我々が筋肉を支配すると云ふことも、やはり此の意志に關係があるのです。故に昔から、此の意志に注意する人は身体の姿勢に注意するのであるから、ちゃんとわかるのであります。

## 精神的活動

夫れからも一つは、我が国の武士道は何であるかと云ふと、やはり意志教育です。其の使ふ処の剣でも、武士の魂と言ふて居る。意志を鍛錬すると云ふことは、あの剣を拵へるに、火の中に入れて打ち鍛ふと云ふことから出来て居る。故に只遊び事ではない。真剣になる処に、意志の鍛錬があるのである。故に明日運動会をするにも、総てを精神的にすることが大切です。之が出来なければ、何にもならぬ。夫れで運動をするにも、今話を聞いておいでになる時でも精神的であると云ふこと、そこに人間の尊い処があるのです。一寸尋ねて見ますが、

- ・ 朝起きた時、又は寝る前に深呼吸をしておいでになるお方は……………稍多数
- ・ 夫れと同時に、声の練習をして居る人は……………

## 声の練習

私共の声と云ふものも、亦よく其の人を表すものである。然るに我が国では、此の声と云ふものが練習せられて居らぬ。故に音楽が発達しないのであります。之は語学をする人にも、音楽をする人にも誠に大切なことです。

故に声を適宜に使ひ、充分に其の意志を発表すると云ふことを結びつけねばなりません。私はやはり、その云ふ様な身体の運動に意志の教育と云ふことを成るべく入れて行かねばならぬ。願はくは、あなた方は毎日深呼吸をすると同時に身体をちゃんと整へて、声の練習をなさると云ふことも誠に大切であると思ひます。

終りに一言御注意しておきたいことは、今は氣候の変わり目であるから、脚気の氣味のある人は起る時節である。

## 成瀬仁蔵講話 2

### 春期運動会批評会後にて — 明治四十三年五月二十一日 —

今、塩井、松浦両教授から段々有益な御批評がありまして、孰れもあなた方の参考とすべきことを尽されましたから、此の上余り私が御注意をする必要はあるまいと思ひます。其の上に、今日は時間が遅くなりましたから、小さい人達は成るべく早くお帰りになるがよいと考へます。只一言、今誰れかの仰った詞の中で、聞き様によ

夫れから此の頃、空扶斯が流行して居るから、斯う云ふ時に食物や住居について注意することが大切であります。私が之れを言ふのは、意志の教育と云ふのは、毎日筋肉の上にも之を行はねばならぬと云ふことを申すのであります。殊に団体の意志を作ると云ふとき、運動会の様な場合から実行しなければならぬ。どーか之を実行する総ての事を精神的にすると云ふことを、実行して戴きたいと考へます。

つてはどーかと思ふ点について申しましょー。夫れは先日の運動会につきまして、小運動会、準備運動会と言ふ様なことがありましたが、之はどーでありましょー。秋が大であれば、春は小。秋は客が沢山あるからほんとして、春はお客が少ないから準備であると云ふ様にも聞こえはしないでしょーか。夫れに、あまり小と云ふことは

あるまい。小と言へば、そゝ大切でないと言ふ様に聞こえ易いのである。故に私は、小とか大とか準備とか言ふのは好ましくない。却つて之は春季運動会、秋季運動会と言ふ様にした方がよくはないかと思ふ。聞く人によつてはどゝかと云ふ様なことはよして、適当な詞をお使ひになることが必要でありましょ。

### 運動会に由つて得たるもの、健康、意志の人

そして一一言、私はあなた方の健康がどゝであるかと云ふことを考へる。運動会に由つて、あなた方の健康は確に増進せられたでありましょ。夫れから日頃言つて居る意志の力、人と共にすると云ふ精神が出来たであろーと思ひます。殊に之れから夏になつて物が腐敗し易くなる。其の上に、今年は窒扶斯なども中々流行して居る様であるから、そゝ云ふものに克つと云ふことが必要である。

### 黴菌につき

第三に注意すべきことは、黴菌であります。之れから段々暑くなつて、そゝ云ふ菌が発生し易くなると云ふこ

ともあるが、夫れを運ぶ人足とも言ふべきものは何であるか。今日の医学者の研究によれば、之から出て来る蠅、又は夜ぶんぶんやつて来る蚊、夫れから蚤などである。此の頃紐育で研究した報告には、一匹の蠅に十万の黴菌が居ると云ふことです。そこでチブスの様な腸胃を犯す病気の黴菌は、蠅に由つて Milk の饘などにくつつかのである。そしてマラリヤ熱とかペストと云ふ様なものは、蚊から来ると云ふことです。夫れで此の蚊とか蚤とか云ふものを防ぐ為に、夜具とか寝衣の様なものも成るべく度々洗ふ。且つ消毒によく注意して、台所の悪水などは始終よく流して了つて、黴菌などを持ち歩く所の悪虫を成るべく我々の生活する近辺におかない様に絶やす、と云ふことが衛生係、体育係の責任であります。又之から脚気などの起り易い季節となりましたから、殊によく食物に注意して、早くから予防をすること。且つ、そゝ云ふ伝染病等の来る仲媒となるものを成るべく防ぐと云ふことが大切であります。之れが学校から始めて凡ての家庭に行はる、様にならねばならぬ。殊に之れから段々氣候が暑くなる時であるから、総てのことを清潔にすることによく御注意下さる様に、私は一言御注意しておくのであります。

成瀬記念館には成瀬仁蔵が発信または受信した書簡が約三五〇〇点収蔵されている。発信者は西園寺公望や渋沢栄一など近代史に広く名前を知られた人々、本学関係者、成瀬の個人的な友人・知人、親戚等さまざまである。成瀬記念館では、成瀬仁蔵の没後一〇〇年にあたる二〇一九年にむけて成瀬仁蔵往復書簡集の編纂を進めている。ここでは成瀬記念館収蔵の書簡のうち、未発表のものを掲載する。今回は一八九六（明治二九）年六月一五日付、広岡浅子より成瀬仁蔵宛て書簡一通である。

成瀬仁蔵宛広岡浅子書簡

明治二九年六月一五日

美墨拝受候。益御

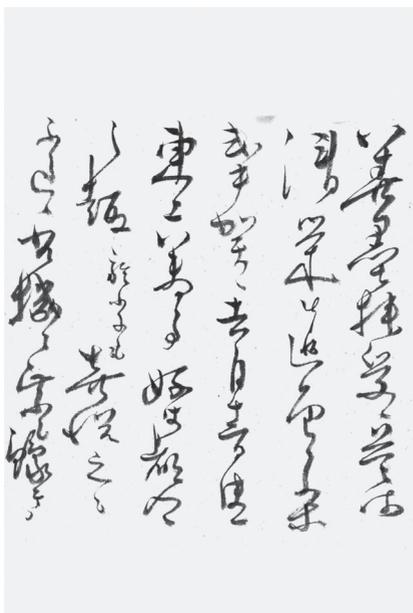
清栄被遊御坐候条

奉賀候。去月十三日御

東上万事好御都合

之趣於小子も喜悅之二

不過候。右機二乗し豫テノ



御目的御計畫被遊候

二就テハ發起人組織

急務之由御文面ヲ

拝スルヤ速ニ帰坂仕度

心意之処生憎当方

事業着炭之期ニ

際し本月末遅クテ来月

上旬迄種々用向有之候。

右ニ付本月末か来月上旬ニハ

必帰坂可致候。夫迄御猶

豫ハ不叶や。尤發起人

組織ニ付テハ小子も考居候

愚意有之其外種々

御目的御計畫被遊候  
 二就テハ發起人組織  
 急務之由御文面ヲ  
 拝スルヤ速ニ帰坂仕度  
 心意之処生憎当方  
 事業着炭之期ニ  
 際し本月末遅クテ来月  
 上旬迄種々用向有之候。  
 右ニ付本月末か来月上旬ニハ  
 必帰坂可致候。夫迄御猶  
 豫ハ不叶や。尤發起人  
 組織ニ付テハ小子も考居候  
 愚意有之其外種々

申上度義も御坐候。若来月

上旬ニ帰坂してハ御計画の

基ニ御差支候事ナレハ

大事也。此手紙着次第

左ニ電報被下候。

スグキハンアリタシ

右御報被下候ハ、当地之

用務豫メ夫々へ命し置

一寸立歸り可申候。併

左候時ニハ又折返シテ下筑

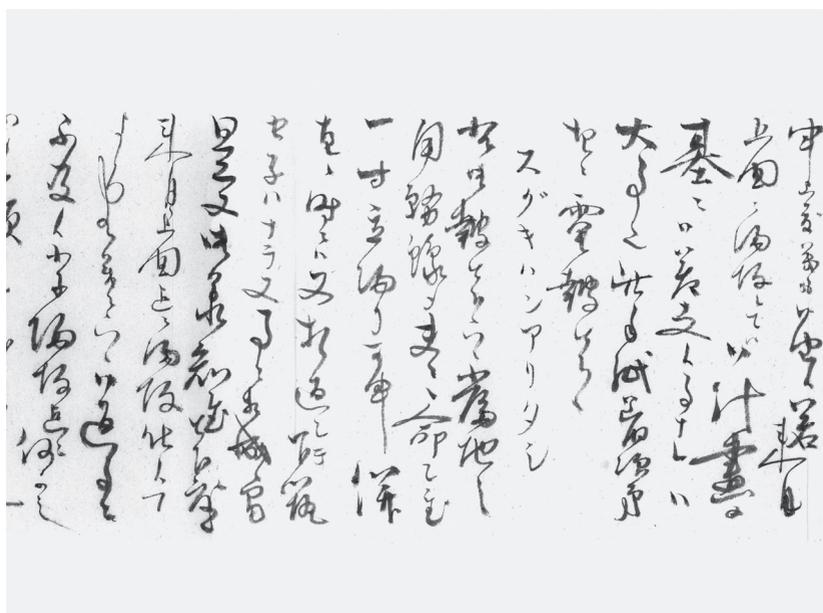
セネバナラヌ事と相成候間

是又御承知置被下度候。

来月ノ上旬迄ニ帰坂仕候ハ、

よろしき義ニ候ハ、お返事ニ

不及候。小子帰坂迄ニ何か之



申上度義も御坐候。若来月  
上旬ニ帰坂してハ御計画の  
基ニ御差支候事ナレハ  
大事也。此手紙着次第  
左ニ電報被下候。  
スグキハンアリタシ  
右御報被下候ハ、当地之  
用務豫メ夫々へ命し置  
一寸立歸り可申候。併  
左候時ニハ又折返シテ下筑  
セネバナラヌ事と相成候間  
是又御承知置被下度候。  
来月ノ上旬迄ニ帰坂仕候ハ、  
よろしき義ニ候ハ、お返事ニ  
不及候。小子帰坂迄ニ何か之

御手順ハ付置被下候。帰坂

候ハ、小子ノ及フ限りハ尽力

仕度情神ニ御坐候。

先者は右貴酬迄

如此御坐候也。

六月十五日

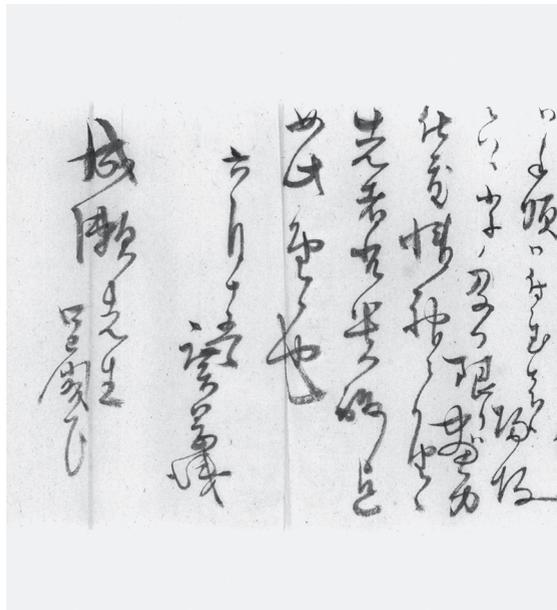
廣岡 浅

成瀬先生

呈 閣下

【解題】

広岡浅子（一八四九—一九一九）は小石川三井家第六代当主高益の娘で、父の死後は義兄の許で、甥にあたる三井三郎助と姉弟のように育った。一八六五年に大阪の豪商加島屋一族の広岡新五郎に嫁ぎ、明治維新の動乱期



に危機に直面した加島屋を救うため実業界に身を投じた。炭鉱経営に加え、一八八八年に加島銀行を設立、一九〇二年には大同生命の創業に立ち合い、卓越した経営手腕を發揮した。

女子大学設立を企図した成瀬仁蔵が広岡浅子の許を訪

れたのは、一八九六（明治二九）年である。成瀬は二月二一日刊行の著作『女子教育』を携え、女子大学設立運動を開始した。大阪府知事内海忠勝に次いで、梅花女学校時代から面識のあった奈良の豪農土倉庄三郎を訪ね、土倉から広岡浅子を紹介される。かねて女子教育の必要を表明していた広岡の許へは、それまでも種々の学校の設立に支援を求める人々が訪れていたが、その教育主義が自分のそれとは違うとして、支援を断ってきた。成瀬もそうした人々の一人と見た広岡は、直ちに賛意を表することはなく、折から九州にある自社の炭鉱へ赴くため、大阪を離れた。そこで初めて『女子教育』を繙いた広岡は、「繰り返し読んで読みましたことが三回、先生の主義に就て御熱心なることは自ら其書の上に顕れて居って、私は之を読んで感涙止まなかつた位でした」と述べている（『日本女子大学校学報』第一号 明治三六年七月発行）。大阪に帰るとすぐ、広岡は成瀬を訪問し、助力を誓い、自ら支援者の獲得に奔走した。このうち広岡は土倉庄三郎と図り各々五千円を創立資金として寄附、以後資金集めの先頭に立って女子大学設立に尽力することになる。

六月一五日付の本書簡では、五月一三日に東京で大きな成果を上げたことが窺える。大阪で手応えを感じた成

瀬は東京へ出向き、時の総理大臣伊藤博文の賛成を求めて面談した。伊藤は直ちに賛意を表し、文部大臣西園寺公望、大隈重信、近衛篤磨らに相談するよう勧めたが、この一連の成功について述べたものと思われる。勢いに乗って発起人組織を立ち上げようとする成瀬に、家業の多忙を縫って協力しようとする広岡の緊迫した様子が伝わってくる。成瀬仁蔵に宛てた広岡浅子の書簡は本状を含め九通が確認されている。（翻刻協力・北野剛）

## 成瀬記念館

### 二〇二一年度・活動の記録

- 取材のため来館
- 4・28 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)17名見学、説明。
- 5・2 附属中学校1年生約250名見学(分館も)、説明
- 5・6 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)3名および教員1名見学、説明
- 5・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)135名見学、自由見学
- 5・19 さくらナースリーより資料移管
- 5・25 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)1名見学、説明
- 5・27 展示オープン(目白)
- 6・3 全国大学史資料協議会東日本部会2011年度総会(於 女子美術大学)に参加(岸本)
- 6・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)11名見学、説明
- 6・9 展示オープン(西生田記念室)。文京ミューズネットの施設紹介のための資料提供。リカレントの学生、授業でポスター制作のため記念館を撮影
- 6・12 「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者164名(日曜日)
- 6・13 資料貸出中の群馬県立土屋文明記念文学館の企画展を見学(岸本・杉崎)
- 6・17 燻蒸のため資料搬出(6・24終了、搬入)
- 6・18 西生田記念室、中学校オープンスクールのため特別開室、見学者28名
- 6・21 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)10名見学、説明
- 6・23 成瀬仁蔵生誕記念日につき分館特別公開、説明、見学者12名
- 6・24 附属豊明小学校1年生3クラス、校長及び教員見学
- 6・27 成瀬記念館運営委員会(本年度第1回)
- 6・29 広報渉外課、ホームページ動画撮影のため来館
- 7・4 附属豊明小学校3年生2クラス及び教員見学
- 7・5 附属豊明小学校2・4年生1クラス及び教員見学
- 7・6 附属豊明小学校6年生2クラス及び教員5名見学。広報渉外課「MOOK」作成のため来館撮影
- 7・7 附属豊明小学校2年生2クラス及び教員3名見学
- 4・1 「新任教員の集い」参加者見学(成瀬記念講堂も)、主事他説明
- 4・8 展示オープン(目白)群馬県立土屋文明記念文学館の学芸員1名、資料借用のため来館(7・1返却)
- 4・14 茂木電気、書庫の震災による被害確認のため来館
- 4・19 展示オープン(西生田記念室)城南予備校、広報誌制作のため来館撮影
- 4・20 西生田記念室、大学入学式につき開室。見学者93名
- 4・22 横浜女学院の校長他3名来館
- 4・25 入学課から依頼の大学見学の高校生およびPTA(1校)27名見学、説明
- 4・27 附属豊明小学校PTA新聞部4名

### 二〇二一年度業務日誌

- 7・8 附属豊明小学校3年生1クラス・6年生1クラスおよび教員4名見学
- 7・11 附属豊明小学校4年生2クラス及び教員2名見学(休館日)。自衛消防訓練(小石川消防署立倉)。
- 7・12 附属豊明小学校5年生1クラス及び教員2名見学
- 7・15 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)67名見学、説明。『成瀬記念館 2009 No.26』(2千部)納品
- 7・19～8・5 平成23年度アーカイブズ・カレッジ資料管理学研修会(於 国文学研究資料館)参加(杉崎)
- 7・22 フォーシーズンズホテル椿山荘にて「智恵子抄創刊70周年記念 智恵子の紙絵と写真がつなぐ親子展」開催、資料提供(8・28)、この期間、希望者に講堂の成瀬仁蔵胸像を公開
- 7・26 本年度当館受入れ予定の博物館実習生6名と事前打合せ
- 8・6 西生田記念室、「オープンキャンパス」のため特別開室、見学者202名。「キャンパス見学ツアー」参加者に説明(12回実施、土曜日)
- 8・7 「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者27名(日曜日)
- 8・9 同志社大学教員1名、資料閲覧のため来館(8・18)
- 8・17 消防設備点検(講堂地下倉庫・分館も)
- 8・30～9・6 博物館実習(家政経済学科1名、史学科2名、文化学科2名、科目等履修生1名)
- 9・7 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)及びPTA46名見学、説明
- 9・10 『青鞥』創刊100周年記念国際シンポジウム「今、世界が読む青鞥」のため特別開館、326名見学、分館75名見学(土曜日)
- 9・15 西生田キャンパスにて社会教育学会開催につき社会教育・生涯学習に関する出張展示
- 9・19 展示オープン(目白)。「オープンキャンパス」につき平常通り開館、見学者108名(祝日)
- 9・21 タウンガイド「文京 歴史と文化マップ」、取材のため来館・撮影
- 9・22 木更津郷土博物館金のすず35名来館、自由見学
- 9・28 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)38名見学、説明
- 9・30 展示オープン(西生田記念室)
- 10・6 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」の下見のため18名見学、説明(分館・講堂も)。防災訓練
- 10・8 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA(1校)23名見学。西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者22名(土曜日)
- 10・9 西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者65名(日曜日)
- 10・13 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)68名及び教員2名見学、説明
- 10・19 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」で76名見学(分館も)。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)6名見学、説明
- 10・22～23 目白祭につき平常通り開館、見学者合計362名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計33名(土・日曜日)
- 10・24 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)36名見学、説明(休館日)
- 10・25 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)58名見学、説明

- 10・28 東京都高等学校進路指導協議会・多摩地区高等学校進路指導協議会教員26名見学、説明
- 10・29 桜楓会三重支部9名、分館見学
- 10・29～30 西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計35名(土・日曜日)
- 10・31～11・1 成瀬記念館のアーカイブズ化に向け、京都大学文学書館、同志社史資料センター他を視察(吉良・杉崎)
- 11・1 入学課、冊子のため館内撮影
- 11・2～4 福井貞子絵崩展および上代タノ展準備のため鳥取・島根出張(岸本・杉崎)
- 11・9 東京新聞の担当者、資料撮影のため来館
- 11・11 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)27名及び教員2名見学、説明
- 西南学院大学教授、助教、大学院生6名訪問、館内施設見学。創立110周年記念出版物 *JWU 1901-2011 A History in Photographs* 納品(成瀬記念館編纂・日本女子大学発行)
- 11・14 本館の国際交流展と連携し、百年館ロビー(11・26)、八十年館ロビー(11・29)にパネルの出張展示
- 11・18 ウェルズリー・カレッジ学長来館(分館も)
- 11・19 創立110周年記念式典につき平日通り開館(土曜日)。西生田記念室、附属中学校説明会につき特別開室、見学者22名(土曜日)
- 11・24 総合研究所研究課題47「成瀬仁蔵および本学学園史研究資料データベースの構築」公開研究会開催
- 11・29 本学非常勤教員1名、分館見学、説明
- 11・30 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)10名及び教員1名見学、説明
- 12・1 高橋未沙、非常勤学芸員として着任。西生田講堂運用委員会に出席(岸本)
- 12・3 総合研究所研究発表会に参加。西生田記念室、3大学キャンパス見学会のため特別開館、見学者23名(土曜日)
- 12・6 新潮社3名、資料閲覧のため来館
- 12・10 「入試相談会」のため延長開館、見学者約100名(土曜日)。附属豊明小学校教員に校章を貸出(12・15返却)
- 12・13 広報渉外課、*JWU Movie News* 作成的ため館内撮影
- 12・16 文京区主催「青鞥」創刊100周年記念展示「青鞥」から現代へ 私たちが引き継ぐものへの資料貸出(12・24返却)
- 1・10 広報渉外課、「大学案内」のため館内撮影
- 1・16 附属豊明小学校3年生、分館見学。図録「福井貞子絵崩展」納品
- 1・17 展示オープン(目白)、平井伸治鳥取県知事来館
- 1・19 筑波大学盲学校の教員2名、博物館相当施設について取材のため来館
- 1・27 「福井貞子絵崩展」ギャラリートーク開催、11時と14時の計2回実施
- 1・28 創立者告別講演記念瞑想会のため平常通り開館(土曜日)。「福井貞子絵崩展」ギャラリートーク開催、11時と14時の計2回実施。展示オープン(西生田記念室)。西生田記念室、附属豊明小学校音楽会(於 西生田成瀬講堂)につき昼過ぎまで開室、67名見学
- 2・1～3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき臨時開館、見学

者合計76名

2・4 2月の土曜日、平常通り特別開館  
2・14 「福井貞子絵展」展示替え、後  
期展示開始

2・18 西生田記念室、附属中学校新入生  
保護者会につき臨時開室、見学者58名  
(土曜日)

2・22 成瀬記念館外壁・屋根・ブライ  
ド改修工事(3・26)

3・6 附属豊明小学校6年生1クラス見  
学

3・7 電動書架定期点検

3・8 防災管理定期点検(分館も)

3・16 展示オープン(西生田記念室)

3・20 大学卒業式のため西生田記念室開  
室、見学者約100名(祝日)

3・31 「オープンキャンパス」につき特  
別開館、56名見学(土曜日)

二〇一一年度成瀬記念館運営委員  
蟻川芳子館長(学長)、石川孝重家政学  
部長、清水康行文学部長、成瀬記念館担  
当理事、飯長喜一郎人間社会学部長、今  
市涼子理学部長/附属幼小担当理事、岩  
崎洋子家政学部通信教育課程長、佐々井

啓教養特別講義1委員会委員長、村井早  
苗教養特別講義2委員会委員長、島崎恒  
藏図書館長、島田法子総合研究所所長、  
岩田正美現代女性キャリア研究所所長、  
新見肇子生涯学習センター所長、若林元  
常務理事、小山高正附属中高担当理事、  
後藤祥子桜楓会理事長、吉良芳恵成瀬記  
念館主事

二〇一一年度成瀬記念館構成メンバー

館長・蟻川芳子、主事・吉良芳恵、館  
員・岸本美香子(主任)、杉崎友美、非  
常勤・梅原裕香、大門泰子、大谷美枝子、  
加藤きよみ、佐久間妙美、佐藤恭子、長  
尾順子、高橋未沙(12・1着任)、山本  
文子、

### 博物館実習

二〇一一年度の博物館実習(第二回)  
は、八月三〇日(火)から九月六日(火)  
までの六日間の日程で行なった。実習生は、  
家政経済学科一名、史学科二名、文化学科  
二名、科目等履修生一名で、企画展「日本

女子大学の国際交流展」の準備に参加した。  
実習生は、事前に二人一組で留学生在に  
インタビューした内容をパネルにまとめ、  
さらに本学の協定大学制度について資料を  
調査し、その源流と変遷、今後の展望に関  
する解説パネルを作成した。  
実習中はこのほか収蔵資料整理、展示作  
業等、学芸員の基本的な業務を体験した。

### 業務統計

開館日数 目白 167日、西生田 127日  
入館者数 目白 約六、三〇〇人  
西生田 約一、一〇〇人

### 資料提供

学園史関係質問受付および資料提供

出版・映像のための資料提供 一〇一件

出版・映像のための資料提供 二八件

出版・映像のための資料提供 二八件

### その他

『成瀬記念館 二〇一一年』の発行 二〇〇

○部

『実践倫理講話筆記 明治四十二年度ノ部』  
の発行 一五〇部

『日本女子大学史資料集 第五一(四)日  
本女子大学校規則 大正四年度―八年度』  
の発行 一〇〇部

研修等参加(全国大学史資料協議会東日本  
部会二〇一一年度総会、平成二三年度ア  
カイブズ・カレッジ資料管理学研修会、文  
京ミュージズネット、展示見学など)  
資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一一年度展示一覧

〔成瀬記念館(目白)〕

4・8〜5・14  
「シリーズ」天職に生きる」

―成瀬仁蔵と長州の男たち」展

5・27〜7・30

および8・4、7、11、18、25

「軽井沢夏季寮の生活

―附属豊明小学校「夏の学校」展

9・19、9・21〜12・22

「日本女子大学の国際交流展」

1・17〜3・3

「シリーズ」創る」(6) 藍に生きて  
福井貞子絵展」

〔西生田記念室〕

4・19〜5・27

「シリーズ」天職に生きる」  
―成瀬仁蔵と「服」展

6・9〜7・29および8・6

「軽井沢夏季寮の生活

―附属豊明小学校「夏の学校」展

9・30〜12・22

「日本女子大学の国際交流展」

1・28〜3・2

「日本女子大学のおひなさま」展



展示の記録(二〇二二年度)

●成瀬記念館(目白)

「シリーズ“天職に生きる”  
成瀬仁蔵と長州の男たち」展  
2011.4.8(金)～5.14(土)



創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は、本学の創立に深い関わりを持つ長州出身者を取り上げた。

成瀬を牧師の道へと導き、アメリカ留学を通して女子高等教育機関の必要性に目覚めさせる契機となった澤山保羅。女子大学校設立運動の最初の支援者である内海忠勝。

同じく協力者となった、時の総理大臣伊藤博文や山縣有朋。彼らが成瀬と同じ長州出身であったことに焦点を当て、写真や書簡、肖像画などを展示した。

「軽井沢夏季寮の生活 附属豊明小学校 夏の学校」展  
(目白)2011.5.27(金)～7.30(土)、および 8.4・7・11・  
18・25  
(西生田)6.9(木)～7.29(金)、および 8.6



卒業生の作品

軽井沢夏季寮についての理解を深めるためのシリーズ展示。今回のテーマは、附属豊明小学校の大切な恒例行事の一つである「夏の学校」。

一九三八(昭和一二)年に幼稚園を使用

して始まった「夏の学校」は、翌年から三泉寮で開かれるようになり、集団疎開による中止の時期があったものの現在に至るまで続けられている。

この展示に際して、豊明小学校の卒業生から絵日記や版画集、アルバムなどを出品いただき、貴重なお話をうかがうことができた。小学校からは、当時の『学寮日誌』やアルバム、小学生が軽井沢で使用するテキストや自然観察の記録などを出品いただき、幅広い内容の資料を展示することができた。また展示期間中、小学生全員が来館これから参加する「夏の学校」について熱心に見学していた。



小学生の見学風景

## 「日本女子大学の国際交流」展

(目白)2011.9.19(月・祝)、  
9.21(水)～12・22(木)  
(西生田)9.30(金)～12.22(木)



学園創立一〇周年を記念して、「国際交流展」を開催した。創立者成瀬のアメリカ留学に始まる国際交流の歴史を紹介するとともに、近年学園で進行していたプロジェクトや、現在大学が力を入れている協定大学留学制度に焦点を当てた展示を行った。

まず家政学部の佐々井啓教授を中心とした途上国への家庭科教育の推進を目的とした「アジア家庭科教育プロジェクト」、JICAの国別研修として委託された「サウジアラビア女性教育支援」などを紹介。続いて協定大学留学制度では、国際交流課

の協力のもと、博物館実習生が実際に留学制度を利用した学生へインタビューを行い、パネル展示を行った。  
この展示は一〇周年記念式典に合わせて、百年館高層棟ロビーと八十年館一階のラウンジ、西生田キャンパスの図書館横の展示スペースで出張展示を行った。



百年館ロビーと八十年館ラウンジの展示風景

## 「シリーズ“創る”(6)

### 福井貞子絵絨展—藍に生きて—

2012.1.17(火)～3.3(土)



造形芸術の分野で活躍する卒業生を紹介するシリーズ「創る」第六弾として、絵絨作家・研究者で鳥取県無形文化財保持者の福井貞子氏の作品とコレクションを取り上げた。

福井氏は一九六二年通信教育部生活芸術科を卒業。嫁ぎ先で鳥取県倉吉市の伝統工芸である「倉吉絨」の手ほどきを受けた。当時すでに衰亡の危機にあった倉吉絨の織り手たちを訪ねて聞き取り調査を行い、その結果を日本家政学会で報告、著書にもま



明治時代の久留米絨の布団側  
富士山、鉄橋を渡る汽車、汽船  
などが描かれている。

とめた。ぼろとして廃棄される寸前の古布を譲り受けたり、古着屋で各地の古絨を収集し、絨織の技法の探求に努めた。福井氏の研究は、無名の織り職人の人生まで拾い上げているところに特色がある。

本展では福井氏が収集した倉吉、広瀬、久留米の古絨の逸品と福井氏が制作した伝統的な倉吉絨に加え、草木染の糸を用いて倉吉の自然を表現した芸術性の高いオリジナル作品、さらに草木染の材料や道具類、資料等を展示した。

会期中、福井氏によるギャラリートークと手つむぎの実演を行ない、繰り返し見学に訪れる人もあり、好評であった。

## ●西生田記念室

### シリーズ「天職に生きる」 成瀬仁蔵と「服」

2011.4.19(火)～5.27(金)



社会の改良を自らの天職とした創立者成瀬仁蔵は、その土台となる家庭の改良が不可欠と考えた。「家政学」を科学に基づく学問と位置づけ、カリキュラムを構成、衛生面や経済面、機能性や快適性という観点から衣生活が見直された。

展示では、授業や家庭実習の場でもあった学寮、同窓会組織桜楓会の家庭部研究会などで研究開発された割烹着や改良服、運動服なども紹介した。

### 「日本女子大学のおひなさま」

2012.1.28(土)～3.2(金)



毎年恒例となったおひなさま展。雛祭りの季節にあわせて開催し、日本女子大学の学寮や、卒業生宅などで大切に飾られてきた明治・大正・昭和の雛人形を展示している。

七段飾りや市松人形、屏風のほか、今回は箆笥、針箱、鏡台、御所車などのお道具類を多数紹介した。

今年も学園関係者のほか地域の方々など多くの見学者が訪れた。

## ■成瀬記念館より

昨春秋、本学は、創立二一〇周年記念として、成瀬記念館の編集になる英文の写真集を刊行しました。東日本大震災により種々の行事が変更を余儀なくされたため、急遽刊行することになったのですが、記念館のこれまでの蓄積により重責を果たすことができました。写真集の英文訳をお引き受け下さったソーンントン名誉教授と成瀬記念館の原稿のやりとりは、猛暑の中で行われましたが、タイトルの命名も含め、素敵な写真集に仕上げることができ、感謝の言葉もありません。また部数の関係から、学生や学園の方々に配布できなかったため、そのお披露目もかねて、百年館1階ロビーで成瀬記念館としては初めての出張展示を行いました。写真集に掲載した写真のほか、開校から一九四七年までの大学校時代の留学生について、大学の協力のもと初めて公開することができました。詳細な分析は本号に掲載しましたのでご覧下さい。日本とアジア諸国との関係が、留学生との関係を通して見えてくると思います。(吉良)

成瀬記念館のアーカイブズ化実現に向けて、長年の懸案だった収蔵資料整理に本格的に着手しました。開館前からのカード目録と開館後の寄贈・移管台帳のデータ化、それらと現物資料との照合、保存形態の最適化、媒体変換などです。とはいえ、通常業務を行ないながらの作業は困難を極めます。今年は、専任も非常勤も春休み返上で作業にあたりました。

(岸本)

昨年度は大学アーカイブズの調査として、京都大学文学書館、同志社大学社史資料センター、国際平和ミュージアムを見学し、各機関の取り組みについてお話をうかがいました。史料管理学研修会(前期)にも参加させていただき、アーカイブズについて勉強した一年でした。学んだ知識を日々の業務に生かしていきたいと思えます。

(杉崎)

昨年一二月に成瀬記念館に着任いたしました。博物館の仕事はとても幅広く、覚えることが山積みです。失敗も多いですが、主事、主任をはじめスタッフの皆さまからの温かいご指導のもと、これからも毎日精進を重ねて参ります。

(高橋)

成瀬記念館 2012 No. 27

二〇一二年七月一〇日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台二一八一

電話(〇三) 五九八一―三三七六

FAX(〇三) 五九八一―三三七八

印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三二六―一四

※無断転載、複製はご遠慮ください

## 資料寄贈のお願い

成瀬記念館では、学園史資料のご寄贈をお願いしております。手放しても良いと思われる資料がございましたら、ご一報ください。

- 卒業アルバム
  - 旧制日本女子大学校（全回生）
  - 附属高等女学校（全回生）
  - 新制日本女子大学（1950～1962）
  - 附属高等学校（1948～1995）
  - 附属中学校（1948～1954）
  - 附属豊明小学校
  - 附属豊明幼稚園
- 本学関係の写真
- 卒業証書
- 校章、バッジ類
- 記念品
- 学生証、生徒手帳
- 夏季寮のしおり、遠足・修学旅行等のしおり
- 行事のプログラム（運動会・音楽会・入学式・卒業式 等）
- 実践倫理ノート
- 各種名簿
  
- 学寮の記録、物品 等
- 附属機関の記録、物品 等
- その他事務文書、物品 等
  
- 成瀬仁蔵関係資料
- 上代タノ関係資料（書簡 等）…2013年1月～3月、上代タノ展開催予定

本学と関係のないものはお引き受けできませんが、迷われた場合はお気軽にご相談ください。

☎03-5981-3376

e-mail: [kinenkan@atlas.jwu.ac.jp](mailto:kinenkan@atlas.jwu.ac.jp)



日本女子大学  
成瀬記念館

表紙は、上の校章を模して製作された記念館  
スタンドグラスをデザインしたものである。